

り、昔文徳天皇の御時、惟喬・惟仁、帝位を争はせ給ひしに、惟仁は、山門の惠亮に頼ませ給ひ、種々の祈をなし給ひし惠亮、其時、持ち給ひし劔を、信玄に授け參らせられしかば、明王院大僧正の綸旨と、此劔を持ち下りて、信玄に與へられにけり。是より甲府喜現寺にて、淺海法印、加々美の法善寺にては、圓性法印、仰を承つて、國家安全、家運長久の大法祕法を行ひ給ふ。其後、御館の主殿に於て、天台・眞言の論議、又は惠林寺・長禪寺の名僧を召集められ、入室説禪等、様々の事共をぞ執行はれる。是よりして、信玄、護摩灌頂をし給ひ、種々の事を行はれけり。此春は、御悅の爲め、惠林寺・長禪寺を始め、寺々へ、信玄を請待をぞしたりける。時宗、一蓮寺へも請待致すべき旨、申したりければ、則ち歌の會を、興行せらるべしとて、既に一蓮寺、其用意をせられ、日限迄も極りける所に、都より今出川左大臣公彦公、下向ある時に、一蓮寺より使僧を以て、跡部大炊助勝資、原隼人佐昌勝に就いて、菊亭左府公、此度の御下向こそ、幸にて候へ。君の御相伴に、左府公をも、招請仕るべきかの由を言上す。信玄聞召され、予が相伴に、菊亭公を招請せんとは如何なり、無用たる

信玄和歌
會興行

べしと仰下さる。斯くて、其日になりければ、大僧正信玄、一蓮寺に入り給ふ。めつけ 監塚原六右衛門・相川甚五兵衛・笠井半兵衛・三澤四郎兵衛・坂本武兵衛に、六十人頭の中城入道伊庵・遠山右馬之助・今井九郎兵衛を差副へられ、此等三人、同心を引連れ、五人の目付と共に、寺中を警固したり。目付伊藤玄蕃・小池主水・武井郷右衛門・島田外記・切田勘之丞に、足輕大將市川梅印・横田十郎兵衛尉・原與左衛門尉を差添へらる。是等は、騎馬同心足輕を引連れ、寺外の四方を打廻り、非常の狼藉を禁めたり。御前の相伴には、小笠原慶安・板坂法印・一華堂・一向宗長圓寺・岡田堅桃・寺島甫庵、此等の咄衆に、長坂入道釣閑、又は檢使など加へられて、十二人なり。次の座には、御舍弟信連入道道遙軒・左馬助信豊・伊奈四郎勝頼・穴山伊豆守信良・御舍弟武田兵庫助信實。是も、信玄の舍弟なり 同一條右衛門大夫信龍、上に 以上十二人なり。縁には、大倉大夫・同彦右衛門・宮増彌右衛門・長命勘左衛門以下の猿樂共、伺候せり。然る所に、今出川左大臣公彦公、御來興あつて、今日は御歌の會と承り候故、斯かる時節に下向致したるこそ幸なれ。參らずんば、傍若無人の行跡ならんと、案内をも申さず、推參仕

候とあれば、信玄、大に喜悅まし／＼ける。扱御歌は、松間花といふ兼題にて、信玄、立ち竝ぶ甲斐こそなけれ櫻花松に千年のいろはならはて

既に、御歌も終りければ、膳奉行武藤參河守、御前に出て、御膳の時分を伺ふ。其時、信玄、何となく寺島甫庵を召し、宋梅洞の事は、何れの書に出て候ぞ。承りたき旨をいひ、汝、書して歸るべしと、遠光院説山和尚の方へぞ、遣されける。扱又、御前の配膳は、御小姓土屋平八郎・曾根孫次郎・三枝惣次・真田源五郎なり。饗應様々、善盡し美盡せり。酒杯數刻にして、人々醉に和し、當座即興の詠歌等、種々の遊興あつて、機嫌よく御館に歸らせ給ひけり。今日、信玄、説山和尚へ尋ね給ひし宋梅洞といへるは、恫は、これ林和靖が住める處の湖山を指していへるなり。林和靖は、世に秀てたる詩人にて、一世の間、若干の詩文を作り、世の人口にある所の名句、多しと雖も、分けて元祐の頃、

疎影横斜水清淺 暗香浮動月黃昏

といふ妙句あり。されば、説山和尚、此句を書して送られける。斯くて、信玄、一蓮

寺より歸御の後、高坂彈正忠昌信、御前に畏つてありけるに、信玄、仰せけるは、予、今日、寺島を説山方へ遣したる事は、計らざるに、菊亭公入御ありし故、一蓮寺は出家の儀なれば、盛膳の用意も、人數の如くにして、其餘分なき時は、相伴人の者共を、座席を立つるは、信玄が恥辱なりと思ひ、取敢ず宋梅恫の事を、いひ遣したりと仰せければ、高坂昌信を始め、各信玄の萬事に慮の深き事をぞ感じける。

武田信虎密書附上州和田の城軍並信玄上州發向の事

前左衛門尉信虎入道は、今出川大納言晴季卿を便り、在京しておはしけるが、密に書を甲府に送らるゝに、五月五日の書札、同じき六月廿四日、甲府に來着す。其趣は、さる永祿七年三月、將軍義輝卿に、拜謁を遂ぐる所に、退出の節、將軍家、廣縁迄送り出でさせらるゝ。其時、信虎平伏して、武田家のあらん限は、これ舊例たるべし。臣が家の規模と仕らんとて退き侍りぬ。然るに、去年五月、三好・松永等、逆心を起し、不意に將軍家の御所を圍む。警衛の諸士、多く討死し、將軍義輝卿、自ら力

信虎の密書

戦し給ひて、營中に火を放ち、將軍家を始め、御所中の男女、悉く討死し、義輝卿自
殺し給ふ。爰に於て、信虎、思ふに、此世に武士のあらん限、公方家の斷絶する事あ
るべからず。能く思慮を廻らさるべしとの密書なり。これ當世、信玄の武威盛
なれば、將軍家の貴族を取立て、天下一統の大功を、立て給へとの奥意なり。信玄、
此書翰を開き給ふと等しく、父信虎の心底を察し、彌、上洛の計略より外は、他事な
かりけり。流石、惡逆無道の信虎も、子を思はるゝ道は、斯くこそと、諸士泄れ聞きて、
感涙を流さずといふ事なし。爰に、管領上杉入道謙信、其勢一萬三千餘人を引率し、
同じき七月、上野國和田城へ押寄せ、ひた／＼と攻め近づく事、恰も、雷霆の鳴動す
るに異ならず。城將和田左衛門尉、士卒を下知し、矢狹間に、弓、鐵炮を賦り、精兵を
俊つて、射立て打立てける。されど、猛勇の越後勢、死人を橋にして、我先にと乗入
らんとす。茲に、甲州より加勢として籠りける横田十郎兵衛尉は、故原美濃入道虎
胤が子にて、原彦十郎といひけるを、故横田備中守、養ひて家を繼がせければ、夫よ
り横田十郎兵衛と號し、養父備中守が如く、足輕を預けられて、形の如く武邊覺の足

輕大將なり。殊に、當時、流行する鐵炮の妙を得て、翔鳥かひとさげはり下針さげはりを打つに過らず。然
るに、此度、當城一の不堅固を、堅めけるに、横田、我が足輕を左右に従へ、狹間を一
度に押開き、我が筒を以て、頭筒と定め、左右緩急のあやどりをなし、詰替へ／＼玉
藥を惜まず打出すに、更に化矢はなかりけり。謙信の一騎當千と頼まれし勇臣等、
枕を雙べて打倒されければ、流石の越兵、攻偃んで、人を楯に取り、敢て進まざりけ
れば、謙信、大に怒り、一陣に馬を乗出し、自ら城に乘入らんとし給ひければ、軍勢
共、我劣らじと攻付けて、既に城門を破らんとす。横田は、爰を破られじと、狹間一
つに、五挺宛の鐵炮を、稻妻の如くに詰替へさせ、差取り引詰め打出せば、矢面に進
む兵を、百二十騎迄、打伏せけり。さしもの謙信、馬を立兼ね、既に危く見えける所
に、輝虎入道の小姓、井地峯勘太郎馳來つて、斯かる危き場所に、大將のおはしまさ
ん事、不覺の舉動にて候。是等は、匹夫の勇にして、仁義主將の勇にあらずとて、馬
の口を取つて、後陣に引退く。謙信、能き沙なりと思はれければ、速に圍を解き、軍
勢をあげて、越後に歸陣し給ふ。城中の軍勢、渴魚の水を得たる心地して、大に横

田が功を感じける。寔に、横田一人の武功に依つて、謙信といふ大勇猛の良將に、圍を解かせ、一城の兵衆を、忽に蘇らしめけるこそ、類少き舉動なれ。越後勢、和田城を取巻いて、攻立つる由聞えければ、信玄、後詰あるべしとて、陣觸し給ふ所に、敵、退散の由、告げ來りしかば、緩々として、八月廿六日辰の刻に、信玄、甲府を出馬あつて、閏八月二日、上州箕輪に着陣あり。同じき十三日、足利へも手遣あつて、由良信濃守が居城、新田へ押寄せ給ふ。利根川を打越えて、御靈二本木、葛和田より、亂入せらる。後陣の押は、穴山伊豆守入道梅雪を大將にて、信州伊奈松本の軍勢共、利根川を、前に當て、備へたり。武田勢は、新田に押詰め、宿城を焼拂ひ、勝鬨を作つて引取れば、足利筋へ働きし人々、在々を放火すと雖も、敵、出合はざれば、引取りけり。斯くて、四十餘箇日、箕輪に滞陣あつて、十月十日、歸陣に赴き給ひけるが、信玄は、謙信此度、和田城に取詰められしにより、早く敵の機を察し、越後、又は飛驒・越中を押へん爲め、同じき廿八日、馬場美濃守信房を召し、信州牧の島に城を築くべし。汝、繩張をして、則ち城代を勤むべしとありしかば、信房、仰を

承つて、牧の島に繩張し、普請丈夫に城を構へ、北國筋を押へて、美濃守信房、長く此處に在城せり。

武田・北條厩橋城攻附武田太郎義信自殺
並鹽止上杉謙信書通の事

永祿十年九月九日、北條氏康父子の使者、甲府に來つて、扱も北越の上杉入道、上州厩橋の城に居て、氏康が領地を掠めんと仕候。早く御馬を出され、加勢あつて給はらば、氏康父子が大幸、是に過ぎずとぞ申越されける。信玄、早速、許諾し給ひ、其勢二萬餘人を従へられ、同じき十八日、甲館を雷發あつて、上州に出馬し給ふ。氏康父子、對顔あつて、悦び給ふ事限なし。斯くて、様々の軍議あつて、同じき十月六日の未明に、打立ち給ふ。北條家の軍勢、三萬五千餘人、武田の軍勢二萬餘人、都合五萬五千餘人、厩橋の城に押寄せて、市町に火を放ち、城を十重二十重に追取巻き、一息に攻潰さんと、捫んだりけり。されども、城中には、楠・菊池を欺く管領入

道謙信、楯籠られし事なれば、城兵、少しも痿まず、打出て、防戦ふ。寄手は、楯を突寄せ、竹把を催けて、難なく城門に攻付け、既に虎口を破らんとせし所に、信玄・氏康の兩將、何とか思ひ給ひけん、早々人數を引揚げらる。斯くて、軍勢、利根川を渡りけるに、折節、大風、古木を折り砂を飛ばし、白日の影、暗夜の如く、山谷鳴動して、放火の烟、旋風に吹かれて、目を明け、口を開く事を得ざりけり。直江山城守兼續以下の剛臣等、謙信の前に出て、城戸を開き討つて出て、敵を咬留め候はんと、頻に諫めたりけれども、謙信、曾て用ひられず。一人も討つて出づべからずと、下知せられける。直江・甘糟を始め、今度に於ては、一向、謙信の分別損のやうに思へども、輝虎入道の宣ふ事、常々、能く圖に當れば、違背するに及ばず、一人も討つて出てざりけり。其間に、兩家の軍勢、利根川を打渡り、靜々と引取りけり。此時、城兵討つて出てたらましかば、兩將を始め、宗徒の者共、悉く討死すべかりしに、謙信、何とか思惟し給ひけん。大に憤み深く、靜まり返つておはしけり。これ謙信の一生の慮の深き所なりと、諸人申しけり。斯くて、海津在城の高坂彈正忠昌信は、小

幡山城守を殘し置き、同月上旬、海津を打立ち、越後の光明山迄亂入し、在々を放火して、同じき十一日、川中島に引取りけり。謙信、之を聞き給ひ、本國、心元なしとや思はれけん。俄に越後に引入られければ、武田・北條の兩家も、歸陣に及び給ひける。去る程に、十月上旬、甲府には嫡子太郎義信、近年獄中におはしけるが、俄に自害し給ひける。これ信玄の仰に依つてなり。行年三十歳にぞなり給ひける。此義信の北の方は、駿州故今川治部大輔義元の息女、上總介氏眞の妹にて、母は信虎の息女なりしかば、此姫君は、正しき信玄の姪にてぞおはしける。去に依つて、其儘、甲府に座す様にと、仰せけれども、舍兄上總介氏眞の方より、迎として、近臣を甲府に着越し、駿府に呼返し給ひけり。今川氏眞、太郎義信と合胸して、信玄を失はんとせし隱謀、既に露顯して、義信伏誅せられ、富飯虎昌を始め、悉く誅せられしかば、氏眞、日頃の企、化事となりぬる故、何卒して、此憤を散せんものと、深く妬み思はれる。然るに、相州北條氏康は、氏眞の舅なれば、小田原に使者を馳せて、氏康と心を合せ、翌年、武田の分國へ、鹽止をぞせられける。甲斐・信濃・上野等は、海なき國な

れば、萬民、難儀に谷り、奈何ともする事を得ず。然る所に、上杉入道謙信、此事を傳へ聞召し、甲州に飛檄を馳せて、申されけるは、謙信承る。近國の諸將、貴老を憎み、分國へ鹽を留め候由、近頃比興の舉動、末代迄も、武家の笑種なるべし。何様、近國の腰拔大將共、弓矢を以て、信玄に勝つ事を得ざれば、左様の弱者共の上からは、斯かる臆病至極の謀を以てなりとも、信玄を痛めずんば、争てか軍を出しては、勝つ事をすべき。謙信に於ては、唯、幾度も、運を天に任せて、勝敗を鬪戦の上に、決せんこそ存じ候へ。鹽の儀は、何程にても、謙信が領國より差遣し候べし。其御國より、手形を以て入用次第に、取らせらるべし。高直に致すに於ては、重ねて仰聞けらるべし。急度申付け候はんと、自筆の書狀を以て、早馬にて告げられければ、信玄を始め武田の老臣等、謙信の武道の正義を感じ、味方にして、ほしき名將かなとぞ申しける。さるに依つて、越後より信州へは、川中島、上州へは猿郷通り、鹽を運送する事、莫大なり。扱こそ、甲・信・上州の間の諸民、鹽を喰ふ事を得て、梅酸の渴を凌ぎけり。

武田太郎信勝誕生 附 快川和尚の夢
並 織田・武田兩家婚約の事

斯かる所に、信玄の四男、伊奈四郎勝頼の御室、去る春の頃より、懷妊の氣ましくけるが、程なく十一月上旬、男子誕生し給ひけり。然れども、難産にて、室家は竟に卒去まし／＼けるこそ痛はしけれ。是は織田上總介信長の養女にて、容貌・心様、殊に勝れておはしければ、勝頼の寵愛淺からず。借老の契、深くおはせしに、惜かるべき齡にてぞまし／＼ける。然れども若君、安穩に出生ありしかば、歎きの中の悦とぞ申しける。信玄、悦喜淺からず。既に嫡子太郎義信は、去る頃自害し、又、二郎は、海野の名跡を繼ぎ、三郎は葛山の名跡、四郎は諏訪の名跡を繼ぎけり。然れば、今般、四郎が儲けし男子を、信玄が家督とせんに恥しからじ。四郎が母は、諏訪頼茂が娘なり。此度、誕生の幼き者が母は、織田上總介信長が娘なり。四郎が父は、苟くも信玄なりとて、山縣三郎兵衛尉昌景・馬場美濃守信房・内藤修理正昌・豊土屋

平八郎に、御一族吉田左近、小姓眞田源五郎を差添へられ、勝頼の御方へ遣さる。土屋平八郎は、己が名代として、秋山越前守をぞ出しける。五人の面々、四郎殿の御方に参り、仰の趣を演説し、若君の御名を、太郎竹王信勝と、信玄、自筆に遊ばされ、武田重代の義弘の太刀、安吉の脇差を遣さる。其上、竹王殿の御乳夫に、温井常陸介を附けられ、勝頼は、御曹子信勝の後見をし給ふべき旨、仰出されしかば、四郎殿に附従ふ者共は、果報のいみじき若君なりとぞ悦びける。茲に竹王丸殿の誕生に、不思議の事共多かりけり。中にも、甲州の逸見、惠林寺の快川和尚と申すは、博識多才の名僧なる故、信玄、渴仰斜ならず。されば、大通智勝國師と申すは、此和尚の御事なり。然るに、快川和尚、其頃、同國鹽の山へ参詣し、二三日が程、其處に逗留してありけるが、或夜、深更に及んで和尚、夢見給はく、慥、鹽の山の向ふと覺しき所に、藤の俵を、又鹽の山と等しく積上げ、其上に、烏帽子直垂を着し、弓箭を帶して在す人あり。和尚、夢心に怪しき人にて候が、何人にてあるやらんと、守り居給へば、彼の人、和尚に向つて、此藤俵、武田の家を續ぐといふと覺えて、夢覺めた

快川和尚
の夢

織田信長
信玄に婚
約を望む

り。其後、程なく信勝、誕生ましければ、扱は察するに疑なく、俵藤太藤原秀郷の再來なる事を、此儀、快川、信玄へ委しく物語ありけるなり。斯かる所に、同じき廿七日、織田信長の使者、織田掃部助、甲府に参禮して申しけるは、信玄公に、七歳の御息女の候由、信長が嫡子奇妙丸に、嫁せたく候。御同心に於ては、信長父子が本懐、是に過ぎずとぞいひ送られける。さるに依つて、武田家の老臣馬場・山縣以下詮議して、密に信玄に申しけるは、信長、既に四海を并吞せんと欲し、上洛を企てられ候ひぬ。然れば、心中に斯様の大望あつて、重縁を望まると覺え候。此儀、御許容あらん事、宜しからじと存じ候。此縁を結ばせ給ふに於ては、行末、當家の大なる害と、なり候はんと申しける。信玄、實もと仰せられ、暫時思慮あつて、汝等が申す所、其理ありと雖も、今、信長が胸意を熟思するに、末は知らず。當時入魂の僞なき證據は、毎度、信長より、小袖を入れ送る所の唐櫃、黒漆にして、武田菱を蒔繪に畫けり。其體、上品の物にして、金・銀・珠玉を鑲めり。又其匣を削らせて見るに、如何にも、無類の堅地なり。信長が方よりは、一年に七度宛定つて、音物の使者を送

る。信玄は、二年に一度も、使者を送らず。然れども、毎度の音物、殊更、念を入れらる、これ偽なきの證か。いてく、汝等に其證據を見すべしとて、年々の唐櫃を取
出させ、削らせて見せ給ふに、果して宜ふ如くなり。此上は、信長が所望に任すべ
しとて、御返事ありしかば、信長、大に喜悅あつて、同じき十二月中旬、信長より縁
結の印として、信玄へ、虎皮三枚・豹皮五枚・緞子百卷・金具鞍籠十口、姫君へ、厚板百
端・緯白百端・織紅梅百端・鳥目千貫・系懸帶けかけおび三百筋、織田掃部助を、使者としてぞ送ら
れける。

武田・今川確執附信玄岐阜へ進物を送らるゝ事

大僧正信玄は、一向天下を掌握てのうちにせん事を、深く思ひ給へば、駿州表、又は帝都へ、
旗を揚げられん内試を、密々にせられん爲め、永祿十一年二月、太郎義信の屋形の
跡に、毘沙門堂を、美々しく建てさせらる。總じて、大僧正になり給ひてより後は、
一向、清僧の行跡にて、護摩灌頂等あつて、種々の行法を、行はせ給ひけり。内々、

今川家を攻滅さんと、近年、密々に調略ありしかば、今川家の老臣朝比奈兵衛大夫
を始め、武田家に、志を通ずる者、多かりけり。爰に於て、同じき五月上旬、駿府へ
使者を以て、貴邊の領地、東參河を信玄にたび候へ。其故は、故義元の弔合戦をし
給はん時、東參河は、信州、伊奈に續きたれば、信玄が領地に、取續けたらんには、加
勢の爲め、出馬仕るも、其便り宜しかるべし。さなきとても、徳川家へ討取られ給
ひなん。敵の物になし給はんより、信玄に給はり候へとぞ、いはせられける。氏眞、
大に立腹し、我が父の弔合戦を遂げんに、信玄に加勢を請ふに及ばず。時節を見合
せ、氏眞一身にて、本望を遂ぐべきなり。當家の怨敵信長と、縁者になり給ふ上は、
信玄も、大方、敵とこそ存じ候へ。徳川家へ、東參河は取らるゝとも、信玄へは、得
こそ參らすまじけれ。信玄へ、東參河を參らせたらば、遠州をも頓て取られ候は
ん。定家の伊勢物語を、酒に沈酔したる體にもてなし、盗み取られ候ひしとて、亡
父義元も、信玄は、表裏の大慾人とこそ申され候へ。氏眞が爲めには、正しく伯父
にて候へども、以來、音信無用たるべし。信玄、調略を以て、徳川家母方の叔父、水

野彌平大夫、内應せし事隠れなし。又、梶水之介を、甲府に呼寄せ、鐵炮十挺・木綿二百端與へ、參河へ馬を出しなば、汝、手引をすべしと、申されし事共、氏眞、悉く知るが故に、水野も、去年の冬、誅戮せしなりと、信玄より彌平大夫へ、送られたる廻狀を、使者に與へ、大に惡口してぞ返されける。是よりして、武田・今川の兩家、長く手切とぞなりにける。爰に、岐阜の織田信長より、去年婚約の進物ありしかば、其返禮として、同じき六月上旬、信州伊奈・飯田の城主秋山伯耆守晴近を差遣さる。信長へは、越後蠟燭三千挺・漆千桶・熊皮千枚・馬十一匹なり。其中、一匹は宇都宮より進上したる鬼河原毛といふ名馬なり。信長の家嫡奇妙丸殿後、從三位中將信忠と號すへ、大左文字安吉の脇差・板倉郷義弘の太刀・紅千斤綿千把・馬十四匹、中一匹は、陸奥立の名馬にて、會津黒と號けられたるを、進上あり。信長、大に怡悅あつて、七五三の饗應あり。七度の御盃に、七度の引出物を給はりぬ。三日目には、梅若大夫に仰せて、猿樂能を興行あり。其後、鶴匠を集め、岐阜川にて川狩あり。鶴を遣せて、晴近に見せしめられ、其獲る所の鮎大小を、信長、自ら撰分け給ひ、晴近に直に渡し給ひ、

甲府に送られけり。逗留の間、種々善盡し美盡せり。晴近、忝き次第を謝して、七月上旬、甲府にぞ歸りける。同月又、信長、使者を甲府に差越され、色々の音物をぞ送られける。中にも、菊の御方へ、四間四方の匂袋を送り給ひけるこそ、例少きものなりけれ。

武田三代軍記 卷之第十二 終

武田三代軍記 卷之第十三

信玄駿河國亂入附今川氏眞敗北の事

謙信氏康
と和睦

茲に、上杉管領入道謙信は、北條氏康と和睦あつて、氏康の七男三郎を養子とし、上杉三郎景虎とぞ、號けられける。さるに依つて、謙信、信玄とも和平すべしとて、甲州の一向宗長遠寺を以て、いひ送られければ、信玄、此事を聞き給ひ、謙信、若大將なる故、物毎荒々しく、和議未だならず。一度和睦せば、信玄に於ては、違變あるべからず。彌、和議を調へんと思ひ給はゞ、此以後、謙信、少しの事をも心に懸け、短慮を發されん事、無益なり。老いたるを敬ふ事、父の如くすといへば、信玄は、年も老たると思ひ、此方に人質なども差越され、以來、他事なく入魂せられれば、我れ何ぞ疎かにすべきとて、長遠寺に、信州岩村田の法興和尚を差副へて、越後へぞ差越

武田上杉
和議破る

されける。謙信、大に怒られ、未だ和議ならざる先より、謙信を以て、早や幕下の如くに、會釋ふこそ安からね。法師とはいはせじ、使僧を討つて捨てよとぞ怒られける。是より彌、手切れとなりける。さるに依つて、馬場美濃守信房が繩張にて、長沼に城を築かれ、市川入道梅印、原與左衛門をぞ籠め置かれける。これ越前の朝倉左衛門督義景、江州の淺井備前守長政、伊勢の國司北畠殿、攝州大坂の本願寺顯如上人、宇津宮萬喜少弼以下、國々の諸侯、又は山門の衆徒に至る迄、武田家に志を通じ、將軍家を取立てられ、天下一統の旗を上げられ候へと、日々夜々の内通、頻なれば、先づ北條家を攻滅してこそ、天下に旗はあげめとて、態と上杉家の和睦も、ならざるやうにぞ計らはれける。然るに、同じき十一月、信玄、少し不例にておはしけるに、醫師板坂法印、御脈を診み、申しけるは、御病氣、近日御快然にて候はん。然れども、一兩年の中に、隔を御煩ひ候はんか。京都より名醫を召し、御薬をも召上げられ候へかしと申す。信玄、仰せけるは、委しき事を、汝が眼の及ぶ所、偽なく申すべしとて、法印に誓紙を書かせられ、存命の際限を尋ねらる。假令、立所に死すとも、争

てか帝都より醫師を呼び下さんとして、夫より上洛の用意甚だ急なり。然れども、諸方の調議、未だ熟せず。これ北條の望を叶へ、且つ上杉入道と、兵を締ぶに依つてなり。人に先ぜられなば、痛快臍を嚙むとも、益あるべからず。先づ北條家を攻潰し上洛すべし。然れば、其手初は、今川家を押倒すべしとして、甲斐・信濃・上野三箇國の軍勢、二萬五千餘人を引率し、同じき十二月六日に、甲陽を發馬あつて、駿州・宍原に討つて出て、山縣三郎兵衛尉昌景を、内房通へ差向けらる。昌景、内房山に押上り、新衆二千人を以て、道を造らせ、薩埵山八幡平へ、押出さんとする由を聞き給ひ、信玄、直に興津の川上を打渡し、横山通を進發あり。今川氏眞、此由を聞き給ひ、切所に向つて戰ふべしとして、駿府の城を打出てらる。先鋒は、庵原安房守・新里式部少輔、一千五百餘人にて、薩埵山金澤邊に陣を取る。岡部忠兵衛尉・小倉内藏之助兩將、今川家の十八人衆を従へて、八幡平に陣を取つて、軍勢、尺寸の地もなく控へたり。大將今川上總介源氏眞、清見寺に本陣を居ゑ給へば、參河・遠江・駿河三箇國の軍勢共、甲の星を朝日に輝し、思ひくゝに、武具の袖を連ねしは、武藏野の秋風の、露吹き散

らしたるに異ならず。家々の旗纒は、三保の松風に翻つて、吉野・龍田の春秋を、一度に見るかとおやまたる。今川の軍兵等、大將の大事、此時にありと、鐵炮に火藥を備へ、弓押張り索引して、敵遅しと待懸けたり。斯くて、大僧正信玄、横山の坂を押上り給ふに、今川家の陣は、薩埵山八幡平を堅めて、敵軍、横山通を押通るを、目の下に直下して、一戰に打散らさんと議して、既に押懸らんとする所に、思の外、山縣昌景、内房通より、薩埵八幡平へ討つて出て、今川家の先隊へ討つて懸る。庵原安房守・新里式部少輔以下、之を遮らんとする間に、大將信玄、龍の海を出づる風情にて、横山通を押出し、清見寺に陣取りし氏眞の旗本へ、眞直に押懸り給へば、今川の一族瀬名陸奥守嫡子中務少輔・朝比奈兵衛大輔・高山備中守を始め、武田家に志を通ずる者共、敵は、味方の旗本へ、切懸ると見えたるぞ。後を取切られては叶ふまじ、一先づ府中に引入れよといふ程こそあれ。見崩に崩れて、引退けば、陣々、大に騒立つて、我先にと落去りけり。薩埵山より清見寺迄、尺地もなく陣取つたる軍勢共、一騎も残らず、敗北したりければ、氏眞、心は矢猛にはやられけれども、本陣の勢だ

も、皆逃去つて、僅か七八十騎には、過ぎざりけり。今は弓折れ、矢盡きたる心地して、這々逃げて、府中の城にぞ打入らる。朝比奈兵衛大輔は、今川の一の老臣にてありけるが、一番に城中へ引入れて、氏眞の長圍爐裏にて、後炙して居たりけるを、小倉内藏助・岡部忠兵衛尉、餘り不審に思ひ、大將氏眞の前に參り、朝比奈兵衛は、別心を存するかと覺え候。早く誅せらるべしとぞ申しける。氏眞、驚き何條さる事のあるべき。夫は申す者の偽にてぞあるらん。斯様の時は、敵より問者を入れて、様々の事を、言はしむるものなるぞと宣へば、兩人承り、朝比奈は大剛の者にて、當家隨一の者には候はずや。今日の駈合に、一番に見崩れして、引退くのみならず、鎧を脱ぎ帯を解いて、腰を炙り罷在る體、一向、逆心に紛なし。敵早や清見寺迄、充滿したる由、如何計らひ給ふべくやと、周章しく申すに、氏眞、大息ついて、兎角、老臣等と呼ばて議すべしとて、三浦右衛門尉に、姓名を記せとあるに、兵衛は居るかと尋ねらる。小倉承つて、以前の所には、見え申さずといひて、人質を尋ぬるに、早や盗み出して、何國ともなく落ち失せたり。すは、朝比奈は出奔せしと、いふ

程こそあれ。瀬名葛山を始めとして、悉く別心し、思ひ／＼に落行きけり。これ皆三浦右衛門尉が、氏眞の寵に誇り、我意を舉動ひ、譜代の重臣等を蔑如にし、民を困め、君臣の禮を失ひければ、忽ち天誅に依つて、源家正統の名家なれども、累代居城をも、軍卒の蹄に、穢され給ふこそ、淺ましかりし事共なれ。

今川氏眞没落附德川源君駿州御出馬

並 秋山伯耆守晴近の事

去る程に、武田家の先鋒、山縣三郎兵衛尉昌景・馬場美濃守信房・小山田左兵衛尉信茂初名彌三郎と號す・小幡上總介信定初、尾張守と號す・眞田源太左衛門尉信綱・舍弟兵部丞昌輝・内藤修理正昌豊、是等七頭の諸將、既に江尻を打越えて宇八原迄押寄せたり。今川家には、宗徒の者共、悉く別心しければ、志ある輩、少々残り止ると雖も、互に人の心を疑ひ、防戦ふべき義勢はなかりけり。氏眞、大に力を落し、唯茫然あきれてぞおはしける。近臣等相議して、兎角、敵の爲め、擒となし申さんも、口惜しかるべしとて、殘兵、少

今川氏眞
没落

少従へられ、山西を指して落ち給ふは、哀れなりし事共なり。斯くて、信玄は、勝つて誇らざる良將故、小池主計三澤四郎兵衛中村彌左衛門窪田介之丞、四人の者を以て、雑人に雑へられ、早く城に入つて、火を懸くべしと下知せられしかば、翌十三日、四人の者共、城に入つて、此處彼處に、火を懸けたりければ、餘烟、四方に吹覆ひて、一時の灰燼とぞなりにけり。茲に、駿州山西、花澤の城には、小原肥前守、遠州懸川の城には、朝比奈備中守、藤枝徳の一色には、粉川芳榮が一子長谷川二郎左衛門尉、楯籠り居たりけるが、朝比奈備中守が計らひにて、大將氏眞を、己が居城、懸川へ入れ參らせて、凡そ三千餘人にて籠りけり。斯くて、武田の先陣は、八幡・沓谷・宇八源・江尻に陣取れば、信玄は、籠鼻に本陣を居る給ふ。然る所へ、今川家の士大將廿一人、兼ねて内通をしたる事なれば、本陣に參り、皆々、人質を出しければ、甲府へ送り給ふ。扱、興津の横山に、砦を築かせ、穴山伊豆守入道梅雪を入置かる。是は穴山殿、興津に續きたる下山の領主なる故なり。又今川家の、庵原彌兵衛といへる武功の者を、召抱へ給ひ、此邊りに、小勢にても、堅固に籠らるべき城地はなき

氏眞懸川
城に入る

信玄久能
山に城を
築く

かと尋ね給ふ。庵原承り、山本勘介晴幸、駿府に罷在りし時、某も軍術を學び候ひしが、勘介、常に申せしは、當國久野山に、逞兵十人にて楯籠らば、凡そ日本國中の軍勢を以て、攻むるとも、容易くは落つまじとこそ、申して候へ。尤も其地利、究竟の所にて、御座候と申しければ、信玄、之を可なりとし給ひ、久能に城を築き、弓・鐵炮、形の如く、兵糧、三年の用意にて、今福入道淨閑嫡子丹後守をぞ入置かれける。斯かる所に、參州岡崎の徳川家康公、其勢、七千餘人を従へられ、遠州井谷に、菅沼二郎右衛門・近藤登之介・鈴木三郎大夫を差置かせ給ひ、濱松端輪の法華寺に、御馬を立てられ、植村與三郎・山岡半左衛門尉兩使を以て、信玄へ仰遣されけるは、當家の軍勢を以て、懸川に押寄せ、今川氏眞の不仁を誅し候べし。尤も大井川を限つて、遠州は悉く、予伐従へん。信玄は、駿河を切治められ、然るべしと仰遣さる。爰に、先年より、徳川家の御舍弟源三郎殿を、駿府に差置かせ給ひけるを、今川上總介氏眞、打捨て、逃げられし故、信玄の方へ、此松平源三郎殿を取置かれぬ。さるに依つて、兎も角も、仰に従ひ候べしと、返事ありしかば、夫よりも、徳川源君は、不入計に御

徳川勢、
懸川城を
攻む

馬を立てさせ給ひ、同じき廿七日、懸川の城に押寄せさせ給ふ。先陣は、酒井左衛門尉忠次・石川伯耆守數正・鳥井彦右衛門尉元忠・大久保七郎右衛門尉忠世・大須賀五郎左衛門尉康高・松平左近・石川日向守・本田平八郎忠勝・榊原小平太康政、以下一人當千の人々、直ちに押寄せ、引包んで奮ひ撃つに、城中防兼ねてぞ見えたりける。爰に又、遠州乾の城主天野宮内右衛門尉は、兼ねて武田家に、志を通じければ、秋山伯耆守晴近、命を承けて、信州下伊奈の勢、三千餘人を引率し、山路を押通つて、遠江の見付の町に打入り、屋敷城を乗取つて、其所に陣を張り、遠州北山家の諸士の人質を、記しけるに、勾坂六郎五郎來つて、勾坂の宗嗣なりと、記させける。次に、勾坂十左衛門來つて、某、勾坂の宗嗣なりと、互に之を争ひけり。時に六郎五郎、先達て、竊に晴近が陣營の城戸の邊りに忍び居て、十左衛門が歸るを待受け、切殺し、直ちに懸川に馳行き、徳川源君へ、秋山晴近が所行を、一々訴へければ、徳川家、安からぬ事に思召し、山岡半左衛門尉植村與三郎を以て、信玄の陣に仰遣されけるは、貴老は、駿州を治められ、予は遠州を従へんとの、兼ねての約束相違し、秋山が舉動こ

そ、心得難く候とありければ、信玄、返答に曰く、秋山以下の者共、其表に在陣仕るを以て、信玄は、遠州をも望むとの御疑心、尤もに候なり。所詮、晴近を呼取り候はんとの趣にて、兩使を返し給ひけり。然れども、秋山、見付を曾て引取らず。徳川家より召せども、參らざりければ、酒井・本多等の智勇の臣と、同じく謀を廻らされ、秋山が方へ、仰遣されけるは、予、晴近を以て、信玄の印を乞ひ、今より尾州を伐治むべし。遠江は、兎角、信玄領せらるべし。其爲め、酒井左衛門尉を、原川迄出すべしと、方便り給ひ、本多忠勝・酒井忠次・榊原康政を差副へられ、秋山が來るを待伏せ、捕へて手籠にし、遠州諸士の人質共を請取り、伯耆守を、二俣へ差越し給ふ。晴近は、危き害を免れ、漸々、信州伊奈へぞ赴きける。

北條氏康後詰附武田勢薩埵山の陣屋を破る事

茲に、相州小田原の北條左京大夫氏康は、今川氏眞の舅なれば、信玄の舉動を安からず思はれけれども、先づ其心を引見ん爲め、使者を、武田家に馳せらるゝ。頃は

永祿十二年正月五日、駿府に參陣し、様々の佳肴を獻じて、申しけるは、氏眞、奢侈第一にして、行跡、人望に背きし故を以て、追伐を加へられし條、尤に候と、懇にい
はせられける。さるに依つて、信玄も同じき十二日、寺島甫庵といへる伽の者を、
小田原に遣され、種々の進物を送らるゝ。氏康、大に怒り、甫庵を伊豆の北條へ差
遣し、禁籠せしめ、氏康が父子として、氏眞を、駿府に還住させずんば、信玄を討果
し、永く憤を散ぜん、と、永祿十二年正月十八日、小田原を打立つて、駿州に押向く
る。相従ふ者共には、北條常陸介・同治部少輔・同新三郎・松田尾張守・同肥後守・狩野
入道一庵・九島伊賀守・大道寺駿河守・多目周防守・荒川豊後守・成田下總守・千葉介國
胤原式部大輔・橋本次郎右衛門尉・内藤大和守・大石信濃守を始めとして、四萬五千
餘人の軍勢共、薩埵山・八幡平・由井・蒲原より三島迄、段々に陣取れば、大將氏康は、三
島の新徑寺に、本陣を居ゑられたり。武田の出拔共、此由を告げたりければ、信玄
聞き給ひ、此度、花澤・山西等の城々へ、軍勢を遣さざる事、氏康が後詰を、察するが故
なりとて、山縣三郎兵衛尉昌景・相木市兵衛尉を大將として、三浦右近・同兵部丞・大

熊備前守以下の相組、凡そ一千五百餘騎、懸川・田中・花澤等の押のため、鞠子へ差向
けられ、其身は、一萬八千餘人を引率し、興津川原へ馳向ひ、興津山の切所に、本陣
を居ゑらるれば、先手の勢は、興津川を前に當て、次第を守つて陣を取る。頃は、正
月中旬の事なれば、餘寒未だ烈しうして、雨雪を誘ふ山嵐、濱の眞砂を卷上げられ
ば、寒風、膚に徹つて、手屈まり足蹇け、敵味方、共に働く事を得ざりけり。爰に於
て、信玄、萩原豊前守・山木土佐守・中村彌左衛門以下の中間頭に仰せて、國中の酒
を、悉く買取り來るべしと命ぜらる。三人の者共、雜人を召從へ、駿府中の酒店に
入り、數百駄の酒を買取つて、興津に歸り參りければ、近郷の村里より、鍋釜を多く
取寄せられ、彼の酒を煖めさせて、士卒はいふに及ばず、中間・倅者・歩・人足に至る迄
悉く之を飲ませられけるに、我もくくと、勇み進んで呑みける體、信玄、御覽じて、汝
等、此酒を呑みて、寒氣を忘れたるかと宣へば、軍勢承つて、さん候。酒にて手足の
暖まりたるよりは、君の御情の有難さに、寒氣を凌ぎ、死して蘇りたる體に、御座候
と申す。信玄聞召し、汝等、斯様の平地に、營をなし、酒を飲んでだに、寒さの忘れ難

きに、敵は薩埵山・倉澤山に取登つて、陣をなせば、塞氣、何程か防ぎ悪からん。察するに、敵兵は、よも山上に依へて、陣を守るべからず。麓の在家に下つてぞ居んずらん。氏康が軍政、何程の事かあらん。唯今の酔の覺めざらん内に、敵の先手共の役所を、踏破つて、敵に一鹽付けよと、下知し給ふ。早雄の魁兵共、承るといひて、唯一息に、薩埵山の陣に攻上り、爰彼所と見廻れども、旗數十旒、木々の梢に翻りたる計りにて、軍勢、一人もなかりければ、陣所々々を押破り、かせもの忤者中間等、少々討取り、武具・馬具・鎧・太刀・刀等、思の儘に、亂取をぞしたりける。

馬場美濃守信房武略の事

斯くて、武田・北條の兩家、日毎に勢を出し、雌雄を争ひけるに、甲陽の士大將は、十番迄の鬪を取つて、一手切の迫合あり。馬場内藤・真田・小山田・小幡・高坂等、各、一人當千の陣將、花々しく働きたりしに、戦ふ度に、敵を追込まずといふ事なし。中にも、高坂彈正は、上杉入道、川中島へ打出てらるゝ事もやと、御暇給はつて、海津に

歸城したりけり。二の新は、跡部大炊助なれば、迫合の番に相當つて、三百餘騎にて討つて出て、松田尾張守と駈合せて、入亂れ捫合ひたり。馬場内藤・真田・小幡などの、武功勝れたる面々の、深々と働くを見て、跡部勝資、其真似をして、北條の勇臣松田に、何の手もなく追立てられ、右往左往に敗走す。本郷八郎左衛門尉は、跡部が備の檢使を承つて、向ひけるが、崩るゝ味方を恥しめて、終に武田の軍勢の、敵に押付を見せたる事のなきものを、穢し、返せと下知し、其身、手痛く働き、竟に討死をぞしたりける。北條家の軍勢、機に乗りて、透間をあらせず、三町計り追詰めしが、跡部、敵に喰留められ、引きも懸りもせらればこそ、既に討たれぬべくぞ、見えたりける。信玄、此體を見給ひ、馬場美濃守信房を召され、跡部、不覺の働して、味方の恥辱を、取る事こそ安からね。汝、馳向つて、松田が備を追崩せと、宣ひければ、信房、承つて仰にては候へども、某、信州牧の島に、在城仕り候へば、彼の處、大事の堺目と存じ、五百餘騎の騎卒、四百騎、城に残し置き、百騎を以て出陣仕り候へば、僅に雜兵四五百人には、過ぎ候はじ。此小勢を以て、松田が大勢の、然も勝

誇つたる軍勢に、駈合せ候はん事、覺束なく存ずるなり。既に、跡部三百餘騎、雜兵千五百餘人の大勢だに、戦損じたる所なれば、此段、御請申難く候。願くは、餘人に仰付けられかしと申す。信玄、重ねて、汝を牧の島に在城させ、上杉の剛敵、又は飛驒・越中の強敵を、預け置くと雖も、信玄が出陣に、必ず先づ、汝を召連れずといふ事なし。これ武功、他人に勝るゝを以てなり。馬場内藤ならでは、あるべからず。辭するに及ばず。兩人の内、早く罷向ふべしと仰せける。内藤罷出で、申しけるは、跡部、大に敗軍して、剩へ咬留められ、早や討死を仕りたるやも知れず。此所を仕返したらんには、馬場殿ならでは、誰か候べき。一刻も早く、馳向ひ給ふべしと申しければ、信房、今は辭するに及ばず、跡部には、何卒足早に引取り候へと仰付けられ、然るべう存ずるといひ捨てて、我が陣に馳歸り、介副の鎧を追取つて、肩に懸け、己が武者奉行を呼んで、跡部勝資、松田尾張守に打負けて、敗走に及ぶにより、二の新みを仕つて、松田を追崩せとの上意なれば、辭するに及ばず、馳向ふ所なり。早く軍勢を、揃へよといひけるに、畏まるといふ儘に、須臾に人數を揃へければ、信

房、頓て五百餘人を引牽し、地黒に山道の旗を押立てさせ、八幡平へ討つて出で、跡部が引取る馬手の方より、五百餘人を三備に作り、我が旗本を以て魁とし、残る二備を以て、奇兵とし、競ひ懸る松田が二千五百餘騎に、面も振らず討つて懸る。松田、之を見て、唯今、馳向ふ敵の荒手は、正しく馬場美濃守とこそ見えたれ。大事の敵なるぞ。然れども人數は、やわか六七百にはよも過ぎじ。小勢を以て、新に押出し戦はんとする。己が武邊を、鼻にかけたるこそ安からね。唯引包んで、一捫に捫み崩せと、采配とを探つて、下知すれば、勝誇りたる松田が勢、足竝を直して、猶豫はず、馬場が旗本二百餘人を引包んで、火水になれとぞ捫んだりける。信房、些とも動搖せず。鐵炮を以て、一放切に敵を打噤ずめ、究竟の騎馬を一面に連ね、敵、馬上にて、跡部を追懸け來り、下立ち隙のなき所を、内甲を見、上に突落させ、馬の平首、太腹、或は鎧の透間、小勢とと後を合せ、突立てける騎兵の鎗に、松田が逞兵十七八騎、枕を竝べ討たれけり。松田勢、是に辟易して、色めく所を、後備の三百餘人、穂先を揃へ、兩方より入違つて、突立てければ、松田が軍勢、四度路になり、崩れかゝ

る所を、馬場か猛卒、根來法師齋大貳坊、崩れ際の鎗と名乗つて、敵五六騎、突伏せ働きけるに、松田勢、足を留め兼ね、咄と崩れて引退くを、追蒐けく、敵を討つ事七十三級、敵陣の一の城戸迄押込み、則ち柵を乗取りたり。斯くて、信玄、軍使を遣され、早々、勢を引揚ぐべしと、仰下されければ、信房、自ら馳廻つて、軍勢を纏め、手軽く引揚げけるに、さしもの馬場が武勇に怖れ、一人も咬付く敵もなかりけり。味方の諸將、大に感じ、信房が武功を仰ぎければ、信玄、大に怡悦あつて、晴信入道が目矩めかねは、毛頭も違ふべからずとぞ宣ひける。斯かりける所に、信房、采配を腰に納め、甲を脱ぎ、高紐に懸けて、御前に畏まる。信玄、早晚いつよりも、心勇氣こころよけに打笑ひ宣ふは、信房が今日の働は、少し強過ぎたる舉動なり。必ず十分の勝は、易の理に背くぞ。予、汝を以て、右の腕なりと思ふぞとて、御盃を給はり、感狀を下さる。内藤昌豊、信房に向つて申しけるは、今日の働、貴殿に似合はざる誤をし給ふ物かな、といへば、信房打笑ひ、さればとよ。弱敵の崩るゝは、討うちごたへなくして、思はずも深入仕る事、未練の舉動と存ずるなり。斯様の格別の働も、蹈へ所なくしては如何、

信玄信房
を賞す

信房が斯様に舉動ふとて、若手の面々など、おめくくと働かん事は、鶉の眞似をする鳥なるべしと、申しければ、跡部、傳へ聞きて、大に憤り思ひけり。信玄、内藤が申す旨を聞き給ひ、武道評議の最上なり。予が家の武備、頂上したる所なれば、面々も其思慮をなすべし。信房が如きは、是非を分つに及ばずと宣へば、信房、面目を施し、我が陣にぞ歸りける。寔に、甲州の軍勢、少しにても、敵に押付を見せたる事、前後始めてなりと、先手の若者共、歌に作つて躍りけるは、猶も茂れや八幡林、紅丸據旗の懸る程とぞ諷ひける。跡部が旗は、白地に日の丸を畫さければ、斯かる怯弱の者には、據旗の日の丸、憚あり。所八幡平なれば、八幡林とはいふなり。竝木に旗を引懸けて、敗軍せしといふ心にて、大に欺き笑ふ事なるべし。

馬場・内藤諫言附馬場・山縣夜討並信玄歸陣の事

斯くて、武田・北條の兩雄、去る正月十八日より、同じき四月二十日迄、九十三日の間、對陣をぞせられける。其間、日々夜々の迫合に、武田の諸將、一度も敵に押付を

見せず。唯、いひ甲斐なかりしは、跡部一人なりけり。又此間に、江尻横山・清水三箇所に、城を築かる。各繩張は、馬場美濃守信房、奉行は今福和泉守奉つて、新衆人足、總て七千餘人、晝夜の分ちもなく、急がれしかば、程なく成就したりける。中にも、清水の繩は、若しも北條家の海賊、不意に來つて、船軍せば大事の軍あるべしとて、信房、分きて祕密の繩をぞ取つたりける。信玄、則ち信州の丸子三右衛門尉に、舟手の勢を差副へて、此城に差置き給ふ。山本入道道鬼齋が船軍の密法は、馬場信房のみに傳へたり。されば丸子は、美濃守が婿にて、船軍の法を傳へ知るが故なりけり。世人、清水の繩の大事、曲尺の習といへるは是なり。扱又、久野の城には、今福入道父子、江尻には、武田左衛門佐信光、横山の城には、穴山伊豆入道梅雪をぞ、籠められける。然れども、武田家の軍勢、甲斐・駿河の間に、大山切所多くして、兵糧通路の便り悪しければ、諸卒、是に苦みてぞ見えたりける。斯程迄、隣國の諸將を切靡けられ、追付、天下を并吞あらん支度、晝夜を捨てられず。然るに、當時、武略に長じ軍の試、密々の軍議等、決斷し給ふ相手に、四臣と號けられて、

尤も重く用ひ給ふは、馬場美濃守信房・高坂彈正忠昌・山縣三郎兵衛尉昌景・内藤修理正昌豊なり。中にも、馬場信房は、山本道鬼が軍旅の奥儀を相傳し、軍配の達人にて、英才俊秀の智者たるに依つて、四臣の隨一とぞ仰がれける。高坂は、先達海津に歸り、山縣は、山西の押に置かれしかば、此度の軍議に、残りし兩人を召し、軍の意見を尋ねらる。内藤昌豊が申しけるは、斯く長陣を張らせ給ふ事、大に然るべからず。醫師が眼を清くせんとして、脚の三里に灸をさせ候と申す。馬場信房は、啄木と申す鳥の候が、自餘の鳥には變り、蟲を取り喰はんとは、穴の後をつゝき、口へ出づるを取り候と申す。信玄聞召し、面々が意見の如くに、予も思ふぞとて、近々、歸陣に定められ、山縣三郎兵衛を、駿府より召寄せられ、敵の陣城一箇所、押散らさせ、又、馬場・山縣に命じ給ひ、今宵、由井源三が陣へ夜討して、敵に眠り覺させよとぞ仰せける。由井源三氏照と申せしは、氏康の二男、後に北條陸奥守とぞ申しける。武州八王寺の城主にて、尤も武名八州に鳴る。味方の諸營を離れ、陣取つて、陣前に柵を茂く振り、篝火を多く焼續け、用心厳しく備へたり。馬場・山縣は、

軍勢を引率し、深更に及んで、忍びやかに押寄する。信房が手に、富田郷左衛門とて、忍の上手あり。是に劣らぬ剛者に、早川三左衛門海野新左衛門、金丸彌左衛門、此四人を以て、忍の頭とし、究竟の騎馬三十騎を、胴勢となし、敵陣の城戸に忍寄り、境段出拔を用ひて、北條家の番人に似せ、忽に由井氏照の陣中に押入り、役所に火を放ちたり、胴勢、之を見て、すは、相圖の火の手を揚げたるぞと、喚き叫んで咄と切入りしかば、敵兵大に騒立つて、武具をすれども、上帯を忘れ、繫馬に鞭打つ所を、胴勢、一度に亂入り、多く敵を討取つたり。信玄、大に感悦あり。馬場山縣が武略、今に始めずとぞ宣ひける。斯くて、四月廿七日、甲府に歸陣あるべしとて、翌廿八日、駿州庵原の山越に、道路なき深山を、原隼人佐昌勝に積らせられ、安々と甲府に、歸陣し給ひけり。此度、北條家の出陣、氏眞の加勢といへるは、其名計りにして、此弊に乗じ、駿州を奪はんとの方便なれば、駿府の城の燒跡には、小倉内藏助・森川日向守・久野彈正・富永・酒井・阿部以下の者共を籠め置き、蒲原・大宮・神田・屋布・興國寺・善徳寺・長久保等の城にも、同じく北條譜代の諸士を置き、氏康・氏政父子、共に

小田原に歸陣せられけり。茲に、徳川源君は、懸川の城を十重・二十重に取圍み、晝夜、息をも繼がせず攻め給へば、城中の軍勢、怵へ兼ねて、過半討たれ落失せたり。氏眞、今は術盡きて、徳川家、古の舊好を忘れ給はずんば、氏眞を、今一度、駿河に還住させ、武田退治の計をなして給ひ候へ。然らば、當城をも明渡し、又、遠州をも參らせ候べしと、種々詞を盡して、いひ送られければ、徳川家聞召され、予、故義元朝臣の烏帽子となりて、舊好忘れ難く候條、御望の如く、和好をなし、駿府還住の方便をなし候はん。御心安かるべしとぞ、返事し給ひける。これ北條父子、様々に嘸ひ給ふに依つてなり。斯くて、懸川の城は、明渡されけれども、駿府の城、未だ普請半中なれば、歸り入るべき城もなく、一先づ戸倉の城に移るべしとて、懸塚より舟に乗り、戸倉の城に赴き給へば、徳川家より、松平若狹守を以て送らせらる。是より氏眞、暫くは豆州戸倉の城にぞ居給ひける。氏眞の寵臣、三浦右衛門尉は、日頃、我意に任せて、非常を舉動ひければ、今川家の滅亡、偏に三浦一人がなす所なり。誅戮して讐を報ぜよと、諸士・町人・百姓迄、一黨して鬪り騒ぎしかば、四海廣しと雖も、

一身を置くに所なく、譜代相傳の主君を捨て、高天神の小笠原を、さりととも頼み、逃込みけれども、小笠原、渠が積悪を惡み、頓て捕へて、縛首をぞ刎ねたりける。斯くて、徳川家は、懸川の城に、石川日向守を差置かせられて、三州岡崎に御凱陣なされけり。

信玄川鳴島出張附津浪の事

去る程に、信玄、伊豆駿河の堺に、出張あるべしとて、甲斐・信濃・上野三箇國の勢、一萬八千餘騎を引率し、永祿十二年六月二日、甲府を首途あつて、富士の山中金玉通を、大宮に着陣あり。此時、内藤修理正昌豊進み出て、是より笛吹峠の方へ、御働さ候へかしと申す。信玄聞召され、予、此度の出陣は、北條が勢を減せんが爲めなり。敵の勢を察するに、今五箇國の領主なり。殊に當時は、上杉謙信と合體する故、東上野も、悉く北條が幕下なれば、軍勢凡そ五萬有餘、六萬にも及ぶべし。此度、三島・葦山邊、方々を焼働かせば、氏康、是に怖れて、蒲原善徳寺・高國寺・三牧橋以下、十

信玄、川
鳴島に着
陣

五箇所の城々へ、加勢を分けて籠らすべし。小田原の勢を減じさせて後、一戦に大利を得んと、思ふなりとて、神田・屋布を、三千餘人にて押へさせ、圓能・興國寺・善徳寺の三城を、又三千餘人を以て押へ、相残る軍勢、一萬二千餘人を以て、葦山・山中迄押詰めさせ、民屋を悉く焼拂はせ、同じき十七日には、三島近邊の在々を放火あつて、翌日川鳴島に陣し給ふ。斯かる所に、俄に風烈しく、大雨頻に降出てたり。陣場奉行の原隼人佐昌勝、大將の御前に參り申しけるは、天氣を考へ申すに、雲の飛行する體、海鳴り山震ひて、頻に大風洪水の、出来るべき様子に御座候。殊更、此所惡き地利に候條、急に御陣を替へられ、然るべく存ずると、詞を盡し申しける。信玄、常は諸臣の諫を、早速に許容あるに、今度は、如何なる思慮かまし〜けん。曾て、隼人佐が諫を容れ給はず、則ち其所に陣し給ふ。隼人が申したるに違はず、雨、頻に強く、車軸を降すに異ならず。信玄、諸勢に下知し給ふは、今宵は曾て寝るべからずと、觸れさせられて、旗本は、猶ほ川近く陣取り給ふ。然るに、其夜、亥の刻に及んで、山鳴渡り、洪水、陸を浸し、逆浪さかまさ來りければ、すはや、津浪こそ打來れと、陣

中の騒動斜ならず、武具・馬具・雜具に至る迄、悉く打捨ててこそ引取りけれ。されども、信玄、さまで驚き給はず、静々と甲府に馬を納れ給ふ。津浪に取られし兵具、幾許といふ數を知らず。爰に、八幡大菩薩の持旗一旒、何としてか取忘れけん。津浪に漂ひ、翌日北條家に取揚げ、大將氏康に參らせければ、甚だ悦喜あつて、九島伊賀守に給はりしかば、九島が家の奇寶なりとぞ悦びける。然るに、其夜、興國寺の城、小勢なりとて、氏康、下知をなし給ひ、福島治部大輔山角紀伊守・太田大膳亮を、加勢として遣し給ふ。されば、北條家の批判には、其夜、彼の三將、百餘騎を従へ、相圖の明松を多く立て、高國寺へと急ぐを見て、武田の軍勢、敵夜討に寄すると驚き、敗軍して、斯く據旗迄、取落し逃げたるは、信玄、一代の不覺なりとぞ沙汰しける。然れども、これ兵家、實の批判にあらず。夜討を怖るゝは、陣營常の事なり。左計りの良將、敵、夜討に寄すればとて、何ぞ一戰に及ばずして、諸隊、悉く敗北せん。洪水・津浪は天災なり。何ぞこれ人力の及ぶ所ならん。此場に至つて、列を亂し、軍勢周章たるを以て、恥辱なりとせば、洪水・津浪の爲めに、溺死したるを譽とせんか。

信玄に對する北條家の批評

皆これ、北條家雜人の批判にして、一つも武具正義の沙汰に中らず。然れども、末代の人口譁しければ、取るに足らざれども、之を記す。これ信玄、原隼人佐が諫を、用ひ給はざるにより、不慮の難儀に及び、剩へ不實の汚名を蒙り給ふものなり。

信玄關東出陣並高坂彈正忠昌信諫言の事

斯くて、信玄は恙なく、甲府に歸陣あつて、常よりは猶ほ、氣色快然たる風情にて、同じき七月五日、保田・香清以下、歌道に携はる輩を、毘沙門堂に集められ、和歌の會をぞ催されける。關路月といふ兼題にて、信玄、斯くぞ詠じ給ふ。

清見瀉空にも關のあるならば月を止めて三保のまつばら原

去る程に、北條氏康は、諸所の城々に、軍勢を分籠められければ、相州小田原に残り留る軍勢、二萬人には過ぎざりけり。信玄、兼ねて斯くあるべしと、思ひ給へば、忍の者を以て、日々夜々に、小田原の體を聞召し、相州亂入の試頻なり。北條の領分、一分間の繪圖を以て、能く地利を考へられ、直に小田原へ亂入つて、箱根へ懸り、三

島へ出づべきか、然れども、其間、敵城餘多あれば、三増峠を越え、甲州郡内へ出づるか、何れも、始の道を歸陣あらんは、危ふければ、三増峠に懸つて、歸陣あるべきにぞ定めける。これ敵國に亂入するに、良將、先づ戦に、勝つ事を先んぜずして、味方の軍勢の進退、自由なる事を第一とす。必ず大敵を後にして、引退く時、味方を切崩さるゝ事、常の事なれば、此所を肝要に、軍勢を扱ひ、還て敵を喰撃つ謀なり。既に一場に於て、同日同敵に向ふ七重の試決して、百戦百勝の理、盡さざれば戦はれず。扱、三増筋は、敵城築井、一所なれば、さまで大事もあるべからず。又、敵を引懸くる合戦に、三増峠の如くなる場所、なしと定めらるゝ。折節、高坂彈正昌信、在府して候ひけるが、汝は早く海津に歸るべし。十月になりなば、謙信も出張すべからず。然れば、押の勢も、多くは入るまじければ、二三千計り残し置き、相備の者共、又は、信州在國の諸士を催しなば、七八千はあるべきなり。是等を以て、海津より討つて出てよ。牧の島に、馬場を殘し置きぬる上は、信州の儀は氣遣なし。信玄、三増にて、若し戦負けなば、築井の城に押を置き、氏康と對陣せん。其時、汝は、甲

州郡内より、深澤筋を押し通り、深澤足柄の兩城を、我攻にするか、又は兩城に、押の勢を置き、小田原へ亂入せば、追手三増の合戦は、戦はずして勝つべきなり。追手、勝利を得るに於ては、搦手の汝も、引取るに、何ぞ難からんと宣へば、昌信承り、仰にて候へども、深々と小田原迄、亂入あらん事は、甚だ以て宜しからず。其故は、當時、上杉北條、水魚の思をなし、一味せられ候故、今は伊豆相模・武藏・上總下總東上野迄も、悉く御敵にて候。其に、當手の御勢を、城々に押を差置かれなば、殘る兵、二萬にはよも過ぎ候はじ。敵に内通の者もなきに、斯く大敵の北條方へ、足長に攻入り候はん事は、心許なく存じ候。其上、先年上杉謙信、小田原の四門蓮池迄、攻入れたる時、討泄したる事を、今に至つて、北條の勇臣等、臍を噛むの由、承り候。然るに、今度、君、亂入ましまさば、必定、方便を催けて、手強き合戦あらん事、治定なり。然れば、危き働にて候條、深く慮を、廻らされ候へとぞ申しける。されども、信玄、曾て諫を容れ給はず。吾、多年の大望なれば、氏康が居城、小田原を、駒の蹄に懸けずんば、争てか天下に旗をも進めんと宣ひて、郡内の小山田兵衛尉信茂を召

され、汝は、郡内より直に武州に發向し、八王寺へ討つて出で、北條陸奥守が城を攻崩し、瀧山にて出合ふべしと宣ひて、同じき八月廿四日、府中の御館を發馬し給ふ。今度は、思寄らざる笛吹峠を越えて、武藏國江戸葛西へと發向あり。小山田と相圖の契約あれば、方々を兼ねて働あつて、或は敵城の二三の曲輪迄踏破り、或は民屋を追捕あり。又は在々放火等、様々の働をぞ仕給ひける。

小山田信茂願書附武州戸取山合戦の事

斯くて、小山田兵衛尉信茂は、常に武略を心に懸け、敵國の繪圖を以て、國々の案内、自國よりも能く知り、殊に此度の合戦を試す事、既に八箇年以來なれば、思ふ儘に、敵を奇術に引載せ、見事に勝利を得んと思ひしかば、富士淺間大菩薩へ、願書をぞ籠めたりける。其文に曰く、

願書敬白

右之意趣者、甲相兩州之辜負、追日令増々和親不知其期、故、我國太守信玄、

小山田信茂の願文

公、催分國軍勢、止嫌疑、捨猶豫、任運於天道、拋身於義路、責順關東諸士、直到相府、動干戈、遂興亡合戰、被欲散累日鬱憤。因茲、經武上兩國、被擊碎小田原之裡。爲本國堅固備、都留郡軍士、各暫被殘鴻溝岐。然爲御嶽。鉢形、其外、攻亡數箇所敵城、既向瀧山、放火必然之由、頻告來之間、爲其手合、集郡中兵卒、凌敵警中、速亂入武陽、欲抽無二忠信。不憑神明加被、臨戰場、爭能得勝。伏願、大菩薩感應真實懇念、合金剛力、無異儀、打入敵國、勵隨分軍功。此時、信玄、以一團扇、決勝一時、惡警邪謀、悉曝骸於軍門、味方勇兵、皆振威陣頭、實上歡臣下、樂再俊三五有年早款擊壞必聽童謠。至求願成就者、今度信茂所着諸武具、并馬一匹、令奉納之、彌凝信心、可奉抽精所丹誠者也。仍願書如件。

于時永祿第十二己巳九月吉日

前兵衛尉平信茂

土峯薩埵御寶毒

斯くて、左兵衛尉信茂は、己が相備、加藤丹後守を、甲武の堺、上野原に差遣し、其身

小山田信茂願書附武州戸取山合戦の事

信茂、北條氏照を攻む

は、手勢二百餘騎、歩卒都て戰隊九百餘人を引率し、北條奥陸守氏照初名、由井源三の領地、武藏國八王寺へ討つて出でんと、同じき十月朔日の未明に、小佛坂を打越えて、駒木野にぞ出てたりける。大將信玄も、其朝、蠅島に着陣あり。然るに、瀧山勢は、武田方の軍勢共、定めて、檜原筋よりぞ寄せ來らんと、兼ねて思ひ居たる所に、案に相違して、小佛坂より寄せ來る由、告げしかば、陸奥守氏照の老臣横地監物布施出羽守、逞兵三百餘騎、雜兵二千餘人を相從へ、九月晦日の夜に打立つて、先づ犬目原へ馳出て、不動坂を押下し、戸取山は、究竟の切所なれば、此所に陣取つて、敵を難所に引入れ、一人も残さず討取れと、馬烟を立て、勇み進んで、戸取山へぞ馳向ひける。小山田は、兼ねて忍の者共を、隈々に隠し置きたれば、夜は走り來つて告げ、晝は相圖の據旗を以て、敵の方便を告げければ、信茂、敵を知る事、鏡に影の移るが如し。斯くて、小山田、敵を思ふ圖に引入れんと、先づ戸取山をば取らんとせず。駒木野より川原宿迄討下し、二百餘騎を四十騎宛、五手に分けて備へさせ、物見を遣し見せしむるに、敵兵、既に戸取山の七八町、阿方迄、相近付き候といふ。小山田

戸取山合戦

聞きて、時分は能きぞ者共と、己が旗本を、戸取山へ押上げて、山上に備へたり。瀧山勢、之を見て、戸取山へ攻上らんと相近付く。山上よりも鐵炮を放ち、弓を射懸くる事、雨脚の如し。されども、瀧山勢、事ともせず、山際へ攻寄する所に、小山田が先手四十騎、戸取山の右の方より押出し、鐵炮を打懸け、攻立つる。瀧山勢、驚き騒いで、山上の小山田が旗本へ、炮弓を射懸け、打懸くるもあり。又、先備へ矢石を飛ばすもあり。左右の敵に氣を吞まれて、正術、既に盡き、茫然果てたれば、炮弓、曾て的中せず。小山田勢、直下して射立て打噤めければ、北條勢、旗の手大に亂れ、色めき立つを、信茂、得たり賢しと、又四十騎、一備を味方の右、瀧山勢の左、山際に付けて、敵の後へ懸らんと、雁行に連ねて、遙々と押廻す。布施出羽守、横地監物、之を見て、敵は味方の後へ懸るぞ。味方の人數をも、前後に分けよと、下知すれども、左右より、透間なく打立つる鐵炮に、北條勢、右往左往に亂れ、四方の敵に途を失ひ、主討たるれども、郎等之を助けず。親疵を蒙れども、引退くるに暇なく、上を下へと騒動するを、又小山田が三の備、味方左の方の澤へ下り、瀧山勢の馬手へ、

北條勢敗

無二無三に懸つて戦うたり。此時、信茂が旗本より守る旗を、一振、振るや否や、敵の後へ廻したる小山田が先手、鬨を咄と作りかけ、喚き叫んで切崩す。北條勢、八方の敵に、術を失ひ、一怵も怵へず、八方へ敗走するを、追蒐けく、思ふ儘にぞ討取りける中にも、陸奥守氏照の郎等、金指平右衛門尉・野村源兵衛尉などいふ、一人當千の勇士、蹈留り終に討死をぞ蒙りたりける。小山田武衛、大に戦勝つて、首を得る事、二百五十一級なり。物始めよしと悦んで、不動坂首塚を打越え、瀧山に至つて、大將信玄に拜謁し、首實檢に入れしかば、信玄、大に感悦あり。信茂が武略、例少き合戦、之を若手の者どもの、手本にすべき軍なりとぞ仰せける。信茂生年廿七歳、未だ壯年に至らずして、斯かる働は、寔に、名譽の勇士なりと、皆人、大に感じけり。

武田三代軍記 卷之第十三終

武田三代軍記 卷之第十四

武田勢所々焼働附馬場美濃守信房參陣の事

去る程に、北條家の者共は、武田信玄、思寄らぬ笛吹峠を打越えて、江戸葛西より寄せ給ふ由、聞えしかば、騒動する事斜ならず。本郷には、山角紀伊守・諏訪右馬之助・太田・篠原・寺尾等の者共あり。葛西には遠山、江戸の城には、富永神四郎在城す。富永、未だ若年といひ、殊に小勢なれば、己が居城を攻められんかと、驚き騒ぐ處に、さはなくして、甲州勢、稻毛・品川・蠅島邊の民屋を追捕せり。六郷に、行方彈正、居たりしが、敵を一支、支へんと、己が居館の近所、八幡は要害の地なりとて、此所へ引籠り、稻毛の田島・横山・駒林以下の者共を引率し、橋を焼落し、亂杙茂く打つて、用心堅固に待懸けたり。甲州勢は、品川の宇多川石見守・鈴木等を攻崩し、六郷

に押出す。然れども、行方彈正、六郷の橋を燒落し、切所に敵を引入れて、雌雄を、一戦に決せんと控へたり。信玄、何とか思ひ給ひけん。此所を打捨て、池上に押通り、日蓮宗の寺、池上寺を追捕せらる。此所は、甲州身延山の下なる故、寺僧出て、様々に歎きしかば、炎上の災を免れたり。此より彼の寺僧を、案内者として、矢口の渡に、舟共、數百艘浮べさせ、稻毛の平間に押渡り、稻毛十六郷に、火を放ち亂取す。此時に、江戸芳林院・大圓寺以下の諸寺・諸社民屋、悉く火災の難にぞ懸りける。爰に、馬場美濃守信房は、越後・飛騨・越中等の押として、信州牧島の城に、残り留り居たりけるが、今度の合戦を、心元なく思ひければ、椎名肥前守泰種・江間常陸介に、四百五十騎を附け残りし、我身は、僅に五十騎を引率し、信玄の跡を慕うて打ちけるが、武州松山にて追付き、信玄に拜謁す。信房申しけるは、今般、小田原への御出馬は、大敵氏康との御一戦なれば、一入面白く候はんと存じ、牧島には、武功勝れたる勇士餘多、用心堅固に申付け残り置き候。さるに依つて、僅五十騎の士卒を召連れ、見物の爲め、參上候と申しければ、信玄は、陣中に能き客人を儲けたりと

馬場信房
參陣

て、近習の面々へ仰せ、馬場を饗應させ給ふは、寔に頼もしき舉動なり。

武州瀧山の城攻附甲州勢相模川を渡す

並 吉良左兵衛督の事

然るに、信玄、北條氏照の居城瀧山の城を攻むべしとて、四郎勝頼を以て、大將と定め、舍弟孫六郎入道道遙軒に、山縣三郎兵衛尉昌景を差副へて、敵後より後援すべき押の爲めに差置かる。内藤修理正昌豊・眞田源太左衛門尉信綱は、小田原筋の手當とし、瀧山城に攻寄せ給ひ、蠅島に本陣を居ゑられ、十重二十重に取圍んで、息をも續がせず攻めたりける。城兵も爰を破られじと、弓・鐵炮の手垂を、矢狹間に賦り、攻兵を毛付して、打落しければ、急に攻入らるべしとも、見えざりけり。されども、勇猛の武田勢、之をば物の數ともせず、屏際に押寄せ、熊手・薙鎌を以て、打懸け、進む者の總角・袖印に取付き、彌が上に、重ねて攻入りしかば、竟に二の曲輪迄、乗込んだり。城主北條氏照、隠れなき大剛の勇將にて、二の丸の多門に打上

信玄瀧山
城を攻む

北條氏照
奮戦

つて、皆、當城を枕にして討死すべし。骸は瀧山の軍門に曝すとも、名を高天の上
に揚ぐべし。本丸を以て墳墓とし、軍卒の蹄にかけさすべからずと、采配を揚げ
て、下知せられければ、城兵、命を鴻毛に比し、義を金石に守つて、突出て、戦う
たり。寄手の主將伊奈四郎勝頼、生年廿四歳、鹿角の前立打つたる甲に、緋緘の鎧、
烏毛を以て五色に織りたる羽織を着し、月毛の馬の五寸計りなるに、金を以て、武
田菱を、間繁く畫きたる鞍置いて、乗り給へるが、早り切つたる大將なれば、鎗追つ
取り下立ち、倫を離れて働き給ふに、武州師岡の城主師岡山城守とて、大剛の勇士あ
りしが、勝頼の舉動を見て、是こそ音に聞えし四郎勝頼、御參なれ、天の與へと悦び、
其穂、三尺計りなる大身の鎗を提げて、勝頼に渡合ひ、追ひつ返しつ突合ひけるは、
天晴、潔き見物なり。勝頼、師岡を追つ懸けて、二階門の下迄、付け入り給ふに、敵大
勢、押隔てしかば、互に引退き、又廻り合ひては突合ひ給ふ。都合、其日に師岡と勝
頼、三度迄鎗を合せらる。斯くて、信玄、此旨を聞召し、吾れ此度は小田原に亂入し、
氏康に、信玄が手竝を見せんと、覺悟したれば、斯様の小敵の爲めに、勝頼、信豊な

武田勝頼
の武者振

どを討たせては、信玄が名折なりとて、俄に瀧山城を卷解し、相原三曾・二田勝坂
邊に陣取つて、唯小田原に亂入の備、益々嚴重なり。斯くて、相模川を渉さるべしと
て、其陣列を定めらる。先陣は、内藤修理正昌豊・小山田左兵衛尉信茂・蘆田下野守・
小山田備中守・安中左近進・保科彈正忠・諏訪五郎・相木市兵衛・栗原左兵衛・板垣三郎・
伊奈四郎勝頼なり。二の手は、淺利式部丞信音・原隼人佐昌勝・跡部大炊助勝資なり。
次は、旗本の前備、市川宮内助・駒井右京進・左馬助信豊と、馬場美濃守は、一手にな
りて、渡るべき由なり。御舍弟兵庫助信實は、諸牢人二百騎の大將なり。繩無理之
助重行・五味與三兵衛貞氏・飯尾彌四右衛門助友、此三人は、浪人の組頭にて、各信實
の隊下なり。扱又、長坂左金吾入道釣閑・小山田大學之助昌貞・大熊備前守・下曾根等
は、旗本組なれば、御旗本と一つに引堅つて、押渡すべしとなり。後備は、武田孫六
入道道遙軒・同一條右衛門大夫信龍・海士尾・白倉依田・應戸、小荷駄奉行は、甘利なり。
扱又、守る備は、山縣三郎兵衛尉昌景・小幡上總介信定・眞田源太左衛門尉信綱・舍
弟兵部丞昌輝等は、後陣に引下つて、諸勢、川を渡す間の警固となりてぞ備へける。

斯くて、先陣内藤昌豊、其勢一千二百餘人、一番に馬を打入れて、續けや者共と、いふ儘に、馬箠を作り、逆浪を立て、向ふの岸に打上げたり。其次、段々列を亂さず、後備に至る迄、少しも猶豫はず颯々と打入れ、一人も流れず渡しけり。斯くて、金田・妻田・岡田・原木に陣取つて、既に小田原に、打入らんとぞし給ひける。爰に、足利左馬頭義氏の後裔吉良左兵衛督は、北條氏康の妹婿にて、蒔田に居住せられけるが、其頃しも、大橋山城守・北見・關加賀守以下を相具して、小田原に在りけるより、蒔田には、女性稚き者計り残り、軍勢無下に乏少なり。多目周防守は、青木に居住せしが、某、爰に居ながら、蒔田殿を敵に踏潰させて、何の面目あつてか、吉良殿に面を合せん。さや、敵を一防ふせぎて叶はぬ期には、腹搔切つてこそ死なんざらめと、藤卷・栗田以下を引連れて、吉良の居館をぞ守護しける。輕部豊前守は、其頃、蒔田に居たりしが、吉良左兵衛の、居所の向ふなる山に取登り、鐵炮を連ね、石弓を張つて待ちかけたり。されども武田勢、爰へも寄せ來らず。藤澤の大谷帶刀が宿所を、追取卷いて、攻めたりけるに、帶刀は小田原にありし故、残りし者共、十方に散亂したり。さるに依つて、武田勢、辛津・前川・酒勾迄攻入り、小田原の城を、乗潰さんとぞさゞめさける。

初鹿傳右衛門尉酒勾川の先陣附香車の指物

並北條家軍議の事

既に、甲陽の軍勢、酒勾の宿に着きしかば、爰にて重疊、小田原亂入の軍議を、決談せられけるに、時しも、大雨連日降り續いて、酒勾川夥しく、水嵩漲り増つて、激浪、岸を浸しければ、輒く軍兵を渡されん事、如何あらんと、衆議區々なる所に、足輕大將の若手の内、初鹿傳右衛門尉は、將棊の駒の指物に、香車といふ文字を書いて、射向懸りに指しなし、馳廻りけるが、逍遙軒、之を見給ひ、大將に近付き、申されけるは、初鹿が潔き出立して候。寔に猛勇の者にて候。此者に、酒勾川の瀬踏を、仰付けられかしとありしかば、信玄聞召し、渠は加藤駿河守が末子、彌五郎といひしかども、初鹿源五郎、川中島合戦に討死し、其跡を繼がせて、今、初鹿を名乗る。實父駿河守昌頼

初鹿傳右
衛門の指
物

は、信玄が旗本の武者奉行にて、武功、衆士に勝れたる忠臣なりし。さるに依つて、傳右衛門、武勇は父が業を受け續ぐと雖も、己が勇に慢じ、諸士を侮り輕しめ、傍輩の憤を含むにより、我れ渠を愛せず。香車は進んで退かざる駒なるを以て、己又、其如く敵陣と見ては、進んで退かぬといふ意味を含み、傍輩無人の舉動をなすぞとて、甚だ無興にしてみましたけるが、暫くあつて、初鹿を召され、汝、此川の瀬踏仕らんやと、宣へば、初鹿、少しも辭せず、畏まり候ひぬと、御前を罷立つて、頓て馬に打乗り、初鹿傳右衛門尉、酒匂川の先陣をするぞ。續けや者共といふ儘に、手勢合せて二百餘人、少しも猶豫はず、川へ颯と打入れて、さしも漲り流るゝ、酒匂川の瀬枕に、逆波を立ててぞ渡しける。初鹿、馬廻を下知しけるは、篋のたぬかた形に馬を游がせ、鞍の跡輪を躑して、三途へ乗下り、手綱を緩くして、馬の頭を、川下へなすべからず。從軍歩卒は、手に手を取組み、鎗の柄を取違へ、引固つて、己が刃に抜かるべからず。力を互にして、向ふの上り場に、心を付くべしと、眞先に馬を游がせけるに、逆卷く波は、鞍を浸し、鎧の總角、波に洗はれ、唯、指物の香車計りぞ見えたりける。

されども、初鹿、少しもひるまず、一人も流れず、向ふの岸に打上りたり。之を見て味方の人々、我劣らじと渡しけり。然るに、旗本、脇備を始め、悉く川を渡して、小田原にぞ攻入りける。北條家には、兼ねて駿河を心元なく思ひ、軍勢三萬餘人を分けて、駿豆の堺の城々へ籠めければ、小田原に残る軍兵、僅に八千餘人なり。大將氏康の四男左衛門佐氏忠、北條常陸介大道寺駿河守、一色に在城し、石卷下野守・九福入道道隨、伊佐・板口を持堅めたれば、先づ一支、支へんとぞ議したりける。此時、大將氏康は、小田原の城に在つて、軍の評議區々なり。時に老臣松田尾張守入道・北條長綱入道幼庵、兩人進み出て申しけるは、去る六月、信玄、駿州富士の裾野に出張せられ、韭山・三島以下所々を、焼働かせらるゝを以て、以前より彼の地に籠置かる一萬八千餘人に、又一萬二千餘人の加勢を、差遣されぬ。然るに信玄、智謀を以て、思寄らぬ武藏より、當國に攻入られ候。今、小田原に残り留る軍勢、僅に八千餘人に過ぎず。機に乗つたる甲州勢に懸つて、合戦を挑み候はゞ、危き軍にて候べし。一色・伊佐・板口を始め、近邊諸城の味方を、召集められ候はゞ、凡て二萬餘も候べし。

し。此勢を以て、當城に引籠り、心を一致にして、防ぎ戦はゞ、元來、短氣なる甲斐・信濃の軍勢共、長途の長陣に、氣屈し勇氣衰へ、兵糧の運送に草臥れ、追散らさぬに、引退かんとこそ覺え候へと、申しければ、衆議、是に一決して、一色表伊佐・板口を始め、城々の軍勢を引取り、小田原の城に引籠り、町人・百姓・女童迄、近郷は悉く城中に取入れられぬ。程遠き在々所々の郷民共は、曾我山・田島・川村邊の深山幽谷にぞ逃入りける。

相州小田原合戦附馬場美濃守信房奇計の事

斯くて、武田家の軍勢、小田原へ攻入りけれども、抄々しく、手に立つ敵もあらざれば、既に四門蓮池迄、攻入りたり。北條家の勢も、討出てく防戦ふ。内藤昌豊が手に、寺尾豊後守・町田兵庫介・神名圖書之助・木部駿河・阿久津大學・久保島・矢島・矢木原・長沼、是等九人、倫を離れて鎗を合せ、思ひく高名す。此時、馬場美濃守は、日頃、謎を好みければ、早川彌左衛門尉幸豊を使にて、先陣にありける内藤修理が方

小田原合戦

馬場信房の奇智

へ、絲毛の具足敵を切るといふ謎を、かけたりければ、内藤取敢ず、小太刀なりとぞ解きたりける。軍使に行きける早川も、往返の間に、鐵炮疵を、二箇所迄こそ蒙りけれ。これ先手の戦の様を、見せしめん爲めの軍使、且つ内藤が安否をも聞き、早手詰の合戦なれば、此の如くにはいひやりける。寔に大丈夫の勇將共なりと、時に取つて、秀才を感じける。武田の軍勢、競ひ懸り、一足も引かず攻戦へば、城兵、颯と引入れて、唯、鐵炮を以て、遠矢にこそは打懸けれ。斯くて大將信玄は、小田原の波打際を押し通り、早川口を妻手になし、湯本の風祭に、本陣を居ゑ給ひけれども、敵、敢て討出てざれば、士卒に仰せて、小田原中の町屋は、いふに及ばず。諸士の宿宿、一箇所も残らず、焼拂はれけれども、一人も出てて、防がんとする者なかりけるは、能々武田勢の鋒先を、怖れけるとぞ見えたりける。關八州の大小名、當時拜趨の小田原なれば、さしも、美々しく作り廣げたる城下、忽ちに渺々たる廣原とぞなりにける。爰に何とかしたりけん。松田尾張守入道が宿所のみ、焼け残りければ、信玄、之を安からず思召し、後日に、松田、廣言を吐かんとこそ、無念なれと仰せければ、

馬場美濃守進み出て、此度の合戦は、信房、僅に四五十騎の勢にて、御陣に押しして、推參致したれば、御前備にあつて、朝暮、合戦を見物仕るのみなり。然れば、焼け残りし松田が宿所を、信房が一手を以て、焼拂ひ申したく候。あはれ、御免を蒙り申さんとぞ願ひける。信玄聞召し、汝が武功を以て働かば、危かるまじとは思へども、至剛の者は、皆、牧の鳥に残し置き、僅の勢を以て、松田が宿所迄、働き入らん事は、千萬心許なしとぞ仰けせる。信房承り、仕課しかせ申さず候とも、難儀に至る程の事は候まじ。總軍中、一備より侍一人に、萱木一把宛、信房が方へ送り候へと、仰付けられ候べしと申す。信玄も、馬場が申す事なれば、早々、許諾あつて、陣中を觸れさせられけるに、我もくと、萱木を、侍に持たせてぞ遣しける。信房、武功の郎等を近付け、方便をいひ含めけるは、汝等、小田原の焼跡に、今宵、寅の刻に及んで、竊に忍び至り、敵、城中より切つて出づる道筋を考へて、萱木を積置くべし。若し其時、敵、見咎めて追拂はゞ、控軍より助くべし、斯くて、思ふ儘に、積課せたらば、火付一人當残つて、皆々、引取るべしと下知し、其身は、逞兵十騎、足輕三十人を引具し、松田が

宿所に押入つて、鐵炮を打懸けけれども、敵、一人もなし。其時、相圖の貝を吹上げければ、方々の口々に、積上げたる萱木に、一度に火をぞ懸けたりける。是と一同に、松田が宿所にも、火を懸けたりけるに、城中より討つて出でんと思ひしに、方々に焼揚る猛火にや怖れけん。防がんとする敵、一人もなかりければ、思ふ儘に、焼拂ひてぞ引取りける。信玄聞召し、悦び給ふ事、限なし。味方の士大將、各危氣のなき信房が働かなと、感ぜぬはなかりけり。

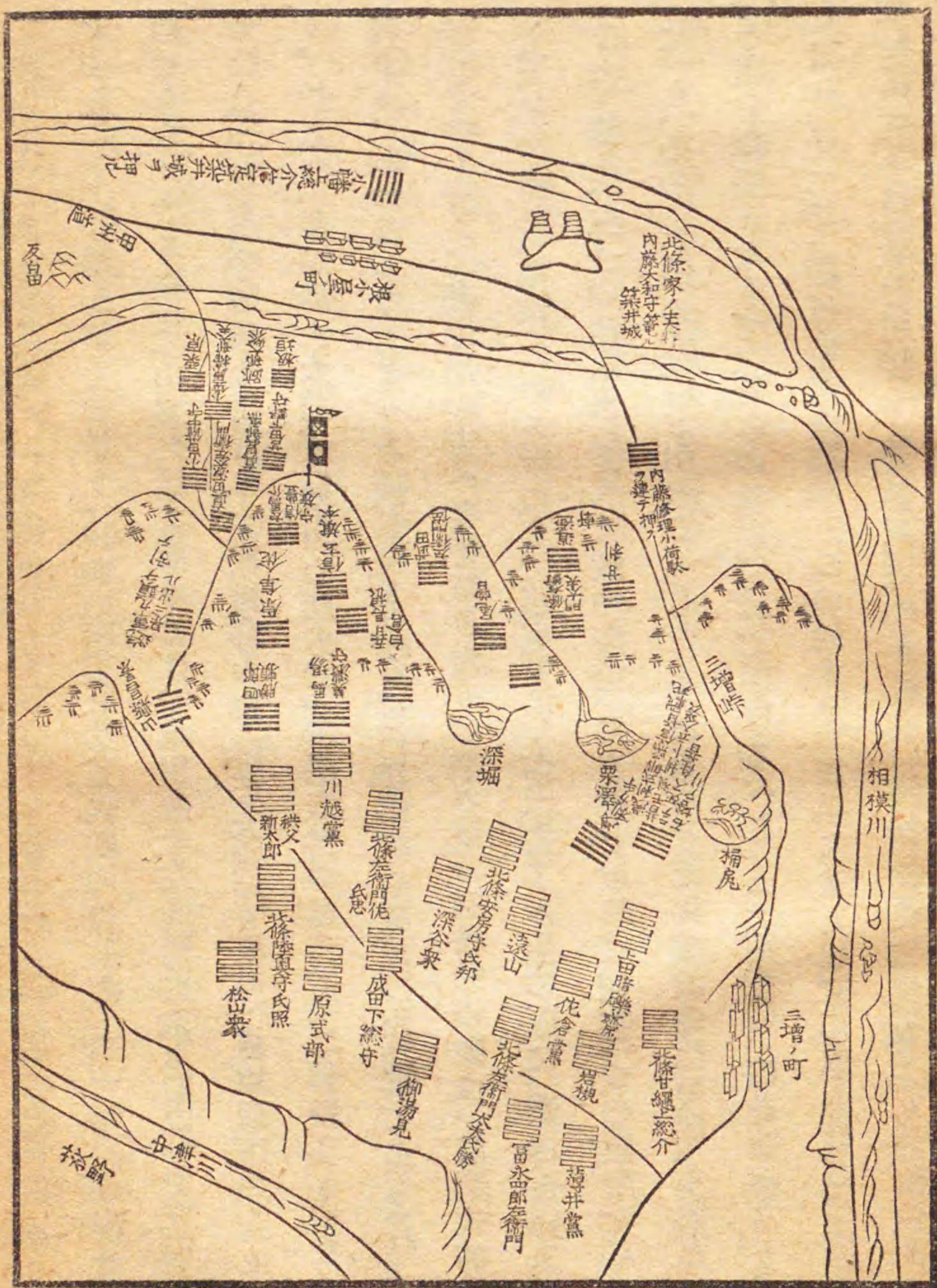
相州三増合戦附戦場の圖の事

去る程に、大僧正信玄は、思ふ儘に働き給ひ、小田原中は、いふに及ばず。近郷の在家・神社・佛閣に至る迄、悉く放火し給へども、敵は小田原の城を、攻落されぬを面目にして、一人も討つて出づる者なかりけり。數月、長陣に及びしかば、今は本懐を達しぬ。歸陣あるべきに極りけるが、敵の機を察せられ、鶴岡八幡宮に、社參あるべき由を、沙汰せられける。氏康父子を始め、北條家には、之を聞いて、先年、謙信

を討泄しぬる事の、口惜しきに依つて、誰にもせよ、其後、鶴岡に入らん敵を、討取るべき術を、能く試し置きたれば、假令ば、信玄、孫武の再來にもせよ。打入るや否や、擒にして、從將附卒、一人も残さず討取り、此鬱胸を散ぜんものと、悦び勇む事限なし。斯くて、信玄、同じき十月四日、風祭を陣拂あつて、引取り給ふ。後殿をば、四郎勝頼、望み勤め給ひけるに、北條の勇臣松田尾張入道進み出で、敵は鎌倉に赴くにもせよ、鶴岡に參るにもせよ、今、目の前を、おめくくと引取らせて、何の面目あつてか、人に面を合せん。不知、追蒐けて咬留めよと、松田が一手附慕ふ。尾張守が長臣酒井十左衛門、真先に進んで追來れば、四郎勝頼、自ら馬を引返し、敵中に蒐入り、酒井と馬上にて渡合せて、太刀打、三度に及びける。小田原より酒勾迄の間にて、四度迄、取つて返し給へば、敵兵、今は咬留め兼ねて、小田原を指して引退けば、是より緩々と、引取り給ひけり。斯くて、生捕の者を召して、是より三増迄の間に敵さへ居るや否やと問ひ給ふ。生捕の中に、杉屋金太夫といふ者、申しけるは、氏康が二男北條陸奥守氏照、舍弟安房守氏邦、同左衛門佐氏忠を始めとして、

成田下總守・上田入道暗礫齋・富永四郎左衛門・高城藏人・北條左衛門大夫氏勝、原式部大輔・遠山・荒川以下、二萬餘人にて、三増峠を取切つて、罷在り候と申す。信玄聞召し、氏康父子、小田原にありてだに、信玄に敵し難し。ましていはんや、氏康が末子を大將にて、家の子・郎等共の支へたるを、何十萬騎にもせよ、軍には、信玄が勝ちたるどとて、翌五日、三増峠へ押懸り給ふ。然れども、先年、上杉謙信、小田原に亂入せし時、小荷駄を奪ひたるに味ひ、又、今度も小田原勢、小荷駄を取らんとぞ巧むらん。小荷駄は、總軍の左の方、往還を通して、金田迄、押勝にさすべしと、使番を以て、小荷駄奉行甘利が方に、仰遣されければ、畏り候とて、追立てく打たせて、三田・妻田邊に馳着いて、此所にて待ち居たり。時に陸奥守氏照の郎等、設樂越前守父子、斥候として馳出でしが、金田の後山の上より、心靜に見積る所に、甘利が手より、米倉丹後守・畑加賀守・田中淡路守・水野四郎右衛門尉・青木彌三左衛門・井上文左衛門・木内六郎左衛門、此等八騎、我先にと、中津川を押渡り、牛窪坂へ乗上ぐれば、叶はじと思ひけん。設樂父子、馬を返して引退くを、遁さじと追蒐けしかど

も、遙に隔りければ、追付かず、又、本の所に引返しけり。斯くて、信玄、三増に着き給へば、小田原勢、何とか思ひけん、中津川を打渡り、半原山に逃げ登つてぞ控へける。此時、信玄、内藤昌豊を召され、小荷駄奉行をば、汝、勤めよと宣へば、修理正、畏つて申しけるは、昌豊、上州箕輪の城代を承りし故、關東筋の御出馬には、進む時に先退く時は、殿をこそ承る筈の、兼ねての上意にて候に、小荷駄奉行を承る事、如何様の思召にて候やと、申しければ、信玄、重ねて、先年上杉謙信、十一萬三千の軍勢を従へ、小田原四門蓮池迄、攻入りしかども、竟に敗軍せしは、小荷駄を切崩されしに依つてなり。明日の小荷駄奉行は、信玄が勤めたく思ふなり。馬場美濃守は、小勢にて参りたれば、申付け難し。然れば、汝より外に、小荷駄を預くべき者なし。押通る道、五町計り去つて、築井の城あり。爰に、敵方の内藤大和守が、籠り居る由、これ亦、大剛の者なり。明日は、殿よりも小荷駄奉行こそは、大切の役なるぞと、仰せければ、内藤、其時、御請を申しける。去る程に、信玄、翌六日、三増峠に赴き給ふ。小幡上總介信定は、騎馬二百騎を引率し、沼といふ所より、築井の押とし



相州三増合戦附戦場の圖の事

て馳向ふに、志大澤□上の山を、岨傳ひに押通る。山縣三郎兵衛尉昌景は、遊軍九頭を引連れて、小幡が跡を押通り、長蛇の頭となりて、敵の後に起り、一時に切崩せと約せらる。去る程に、山縣に従ふ面々には、真田源太左衛門尉・小山田備中守・同兵衛尉・真田兵部丞・蘆田下野守・小笠原掃部大夫・跡部大炊助・栗原・板垣以下の人々なり。然るに、此等の士大將、沓地川の此方、二呂根迄討つて出て、二呂根より下澤へ馳下り、敵の後へ懸らんとぞ議したりける。内藤修理昌豊は、小荷駄を引連れ、三増峠を押上げて、沓地川の方へと押行きたり。斯くて、三増峠の殿は、淺利式部丞・信音、峠の南に、栗澤といふ澤あり。桶尻といふ沼、夫より遙の西に、深堀といふ堀あり。以上、三つの池水あつて、人數の進退、便り悪しければ、此三つの難所を弓手になし、南の方、峠の本道を引取るべしと、定めらる。馬場美濃守信房は、小勢なれども、會釋勢となりて、旗本の前に備へて引取るべし。二の手は、四郎勝頼なり。然るに、此二手、桶尻・栗澤・深堀、三つの池水を、馬手になしてぞ引取りける。殿・會釋勢の三手は、敵を引懸くる合戦の要備なれば、淺利が備に、旗本よりの檢使とし

て、曾根内匠助を遣さる。馬場美濃守が備には、真田喜兵衛尉昌幸を差越され、勝頼の備には、三枝勘解由左衛門尉晴行をぞ越されける。次は大將の旗本なり。馬場勝頼の二手は、敵、左右なく、旗本備に切懸らんとするを、押へては引き、押へては引きする備なり。殿備は、又、敵、急に駈立て捫み崩さんとするを、返合せて強く防戦ふの備なり。扱又、旗本組は、左右の備、しまり備、都て十六備なり。是等は、夜中より三増の山に押上つて、三増峠を馬手に見て、本道は小荷駄雜人を通し、戦隊の諸手、何れも山を總越にして、周章逃ぐるやうにぞ舉動ひける。左馬助信豊は、是より猶ほも、南の山上に備へて、遊軍の山縣以下、思ふ圖に押出し、戦半ならん頃を見切つて、守る旗を振り給ふ役なり。斯くて、敵方の魁兵北條上總介綱成・同陸奥守氏照以下、敵は逃ぐるぞ。追蒐けて討取れとて、淺利信音が備に、無二無三に切つて蒐るを、淺利、心得たりと取つて返し、暫く支へて捫合ひたり。馬場信房、四郎殿の備にも、敵、急に切懸りければ、同じく返して防ぎ戦ふ。此時、北條甘繩上總介備より、早馬を以て、氏康父子に急ぎ押付け給へ。敵、三増峠を總越に備を亂し、道もな

三増峠合戦

き所を、右往左往に引取り候。唯今、急に追詰め候はゞ、必定、敵を追崩し、三増坂を真下りに、まくり下し候はん。御旗本を一刻も早く、押付けらるべしとぞ告げたりける。信玄、山上より遙に之を見給ひて、北條上總が備より、早馬二騎馳歸るは、氏康に早く押付けよ。當手の戦、嚴しければ、早く勝負を決せんと、急を告ぐるの騎馬なり。氏康が旗本の來らん先に、追崩しのけんと言へども、山縣以下の遊軍、切所を越えて押通れば、人馬の駆引、自由ならず。未だ長蛇の首尾を合せざれば、心ならずも待合せ給ふ。此時、内藤昌豊は、寺尾豊後を軍使として、馬場信房が方へ、いひやりけるは、

待つ宵に更行く鐘の聲聞けばあかぬ別れの鳥はものかは

といふ古歌を、謎にして懸けたりければ、車牛・離牛とぞ解きたりける。抑、此謎を、車牛・離牛と解きたる事は、古歌の意を以てなり。待つ宵に、其方様の人、未だ來らざるに、早や、明方の鐘を突出せば、假令、來つて積る事共を、語り明すとも、早や、東雲の頃なれば、夜、暫くもあるべからず。況んや未だ思ふ人の、來らぬこそは恨めし

けれ。夫さへあるに、來つて語り明し、別れの鶏は、猶更、盡きぬ名残なり。然れども、二つを比べたらんには、別れの鶏よりは、待つ宵の鐘こそ、恨めしきといふ古歌の心なるに、唯今の軍も、先づその如く、敵の來つて待ち儲けたる備に、懸り戦ふ間の懶く、味方は方便を儲けたれば待長く、唯待つ宵の鐘の心地こそすれとなり。

又、離牛は、斯く迄、待ち儲けても、敵を追崩し、速に勝利を得る事は、咬付く敵を、武略を以て追つ散し、切退けざれば、勝つ事を得難し。さるに依つて、離れにくさよとなり。然はあれど、此待長さに比べては、駈合せ戦ひて追崩し、勝利を得る事は、物の數かはいふなり。歌道・武道、其義、遙なりと雖も、理は一つなれば、深く吟味して知るべし。此秀歌に依つて、待宵の小侍従と呼ばれ、武勇、萬人に傑出するを以て、今日の小荷駄奉行とはなれり。此古歌の義理に於て、兩用何れが殊勝なりとせん。時に隨ひて、臨機應變の秀才かなと、馬場・内藤の兩雄を、敵國の諸卒迄も、感じ慕はずと、いふ事なかりしとかや。實はこれ、山縣以下の遊軍、廻り至るや否やを、見せしめん爲めの軍使なり。爰に、北條陸奥守氏照の家の子に、大石遠江守

といへる、大剛の兵ありけるが、味方を離れ、真先に進んで働きけるを、信玄、山上より御覽あり。勝頼が備に向つて、白き羽織着たる武者の、倫を離れて働く形勢、天晴、さる兵とこそ見えたれ。あたり男討たすべからず。相川甚五兵衛・伊藤玄蕃允・原大隅守・石坂勘兵衛、四人急ぎ馳向つて、生捕り來るべしと仰す、先づ石坂は、勝頼の備に行き、彼の者を討つべからずと申せと宣へば、畏まつて、四人一同に馳向ふ。石坂、勝頼の備に馳參れば、相川は追繼うて、大石に鎗を合す。原大隅・伊藤玄蕃允は、後より廻つて、左右より組留め、則ち御前に連れ來る。信玄、悦喜まし／＼て、死を免され召使ひ給ひける。斯くて、淺利・馬場・勝頼、三手の戰甚だ強く、敵方の士大將北條甘繩上總介・上田暗礫齋・北條左衛門大夫・同安房守・佐倉遠山・薄井なんどいへる、各、關八州に勇名を振ふ者共、旗の手を龍粧に進めて、淺利・信音が備に、必死と咬付き、遁さじと攻戰ふ。淺利、敵の大勢を足下に見下し、桶尻・栗澤の切所を左右に受け、物々しやといふ儘に、追ひつ捲くつ、火出づる計りに拵合ひける。されども、敵、目に餘る大勢にて、弓・鐵炮の飛行する事、唯、村雨の降通る如くなれば、既

淺利・信音
戰死

に、信音、鐵炮に中りて、馬より逆様に落ち、うんと計りに死したりけり。敵、是に機を得て、味方の死骸を踏越え、小旗をうつぶけて、真幕になり攻上ぐれば、信音が備、亂立つて既に崩れんとする所を、旗本よりの檢使、曾根内匠助、大音揚げて、檢使は此時の爲めなるぞ。汝等、一足も引くべからずと、采配を探つて下知すれば、流石名將の譽風、何れも名を惜み、義を先んずる勇士等、踏留つて、備、少しも亂れざるは、檢使曾根が武功なり。此二の手に、備へられし一條右衛門大夫・信龍も、旗の手を進めて押懸けらる。南の方、馬場信房が手へは、氏康の二男、陸奥守氏照・左衛門佐氏忠・秩父新太郎・成田下總守・富永四郎・左衛門・原式部・川越・深谷・松山黨、一同に押懸つて、荒手を入替へ／＼戰ひけるに、此手の檢使、真田喜兵衛・尉昌幸、此手の一番鎗ぞと名乗つて、究竟の武者二三騎突伏する。信房が手に、鳶大貳房が弟、二位といへる大剛の法師、真田、既に一番鎗を入れしかば、旗本の二番鎗をして、何の詮かあらんと、大身の鎗をからりと捨て、四尺三寸の大太刀を引抜いて、敵中に切入り、近づく者を、八騎迄切つて伏する。されども、敵は大勢にて、備を繰越し／＼、彌が

上に押懸るに、馬場が軍勢、九牛が一毛なれば、左計りの信房も、手先を廻し、爰を先途と攻戦ふ。二の所に備へられし四郎勝頼、軍勢を勇め、自ら鎗を提げて、眞先に進み、横合より懸り給ふに、原隼人佐も、同じく跡を詰めて押懸れば、敵味方の諸手入違へ、凱歌・鐵炮の音・陣雷、青天の上に徹り、旌旗、馬蹄の馳違ふる音は、須臾に坤軸も碎けぬべくぞ見えたりける。斯かりける所に、山縣三郎兵衛尉昌景、遊軍九頭、都合其勢五千餘人、下澤の細道を、雁行になりて押廻し、漸くして、旗先下澤の山鼻、深堀の左、敵軍の遙か弓手の後に、見えたりけるを、左馬助信豊、合戦の勝利是なりとて、守旗を一振、振り給ふと見えけるに、旗本の前備、各山を眞下りに押下せば、諸手一同に、凱歌を作りかけ、百千の雷の、一度に落ち懸る風情なるに、遊軍の九備、黒雲の起るが如く、龍の水を得たる勢にて、敵軍の弓手、後の方より無二無三に懸り、我れ劣らじと、鎗を入れて攻立つれば、北條の軍勢、前後の敵に途を失ひ、總軍、一度に崩れ立つて、三増峠を眞下に、衛士原へと逃ぐる者あり。中津川・荻野を指して、落行くもあり。或は馬を乗離して、歩立になり、是非なく腹を切るもあり。從

北條勢敗績

者は主に離れ、主人は郎等を見捨て、見歸の鞭を繁く打つて、諸鎧を當てて引退く。遁さじと甲州勢、馬引寄せ、打乗つて追詰め、手先へ乗懸り突落し、分捕高名、算木を亂すに異ならず。敵の斬首を得る事、都合其數、三千二百六十九級なり。大將氏康父子、半原山の防方、荻野迄馳來り給ふに、味方の敗軍、大水の出づるが如くに逃げ來り、合戦の様を告げければ、氏康、大に齒嚙をなし、大音揚げて怒り給ふに、北條左衛門大夫氏勝、仰甲になりて馳來り、御旗本の遅かりけるにより、味方、敗軍に及びぬるこそ口惜けれ。然れども、信玄の耳目と頼まれし淺利式部丞信音を、某が備より、鐵炮を以て打落し候ひぬといへば、氏康、少し機嫌直りけり。斯くて信玄は、思ふ儘に戦勝ち給ひ、三増峠を打越え、沓地川の山王の瀬を打渡り、反そりばたけ畠といふ所に至り給ひ、勝鬨を執行はれ、則ち陣を取敷き、軍勢を休め給ひける。其翌日、馬場美濃守信房、内藤修理正昌豊、大將の御前に參り、昨日勝頼君、自身に横鎗よこやりを入れられ、武勇の舉動をなされし事、今に始めぬ事ながらも、扱々、武將の器に當り給ふ事共、今更申すも愚なりとて、感涙を流し申したりければ、信玄、其事は何

とも宣はず。それ莊夫の涙といふ事あり。今、信房・昌豊が感涙を見て、思ひ當れり。古より唐にても、至つて勇猛に誇る者、必ず物に感動す。予が家にては、故萩原常陸介昌勝、武略神通の者なりしが、忠貞義勳を見ては、必ずしも涙弱く、早く沈涙しけるとなり。旁も、夫に同じとぞ宣ひける。斯くて、同月八日、反島を陣拂ひあつて、甲館に馬を入れ給ふ。

北條方所々落城附黄八幡の指物並蒲原落城の事

斯くて、同じき十一月五日、大僧正信玄、甲斐・信濃・上野・三箇國の軍勢を、引率ありて、伊豆・駿河・相模の國堺に、出張あり。北條家の城々を、攻抜き給ふ。中にも、深澤の城には、北條左衛門大夫氏勝、楯籠りけるが、信玄の向ひ給ふを聞きて、夜に紛れ城を落ちて、何國ともなく出奔しけるに、如何計りか周章ちやうけん。氏勝、重代の家寶、黄八幡の指物を、取落してぞ退さける。抑、此氏勝は、今川家の勇臣福島上總介が孫にて、上總が嫡子福島左衛門大夫綱成が子なり。然るに、左衛門綱成、相州に

直八幡殿

落魄し、離倫絶類の勇士故、氏康、之を用ひて、相州甘繩の城主となし、北條氏、及び家に傳はる綱の一字を給はり、指物は朽葉の四半に、墨にて八幡大菩薩を書きけり。其身、直に地黄八幡なりといふ意なり。されば世人、黄八幡左衛門とぞ呼びける。嫡子氏勝は、福島辨千代丸と號けられ、氏康の小姓にて、常に左右を去らず。川越の夜軍に於て、絶倫の武功あり。然るに、父左衛門大夫、受領の指物を譲り、己は、北條上總介と名乗りけるに、關八州の諸士、直八幡殿とぞ渴仰しける。然るに、彼の取落したる指物を、信玄に獻じ、若手の面々が申しけるは、扱も、去る三増合戦の御勝利にて、君の武威を怖れ、さしも鬼神の如く聞えし北條氏勝、黄八幡の指物を捨てて、落去候。偏に、氏勝が臆病の様に覺え候と申しければ、信玄聞召し、武道不案内の批判、左様に申す者こそ、臆病の舉動ならん。北條左衛門大夫が武名は、當時、天下に隠れなく、參州の徳川家、會津の蘆名盛氏・藝州の毛利元就・尾州の織田・北越の謙信、是等の豪家にては、稀なる勇士とこそ聞えしか。然るに、氏勝が下人、指物を取落したりとて、何ぞ氏が怯弱ならん。又、一命を惜み功名を捨て、信

玄に恐怖し、逃げたるなんどいはんも、無下に拙き批判なり。氏勝は、脚下の恥を知る者なりと仰せければ、諸士、畏入りてぞ候ひける。其後、真田一徳齋が末子源次郎を召され、氏勝が武勇に、あやか靈體るべしとて下されけるに、源次郎、己が家の奇寶として、子孫に之を傳へけり。後に、真田隱岐守信尹といひしは是なり。其外、足柄新庄・鷹巢長久保・山中・弘國寺・善徳寺・神田・屋布等、以上九箇處の城々、落城に及び、芳賀伯耆守・北條常陸介・松田新次郎以下、悉く小田原に逃げ歸れば、新庄・足柄・山中等は、城を燒捨て給ひ、深澤の城には、小山田彈正に、駒井右京亮を差添へてぞ、籠められける。斯くて、北條新三郎が籠りたる、蒲原の城を、攻めらるべしとて、同じき十二月五日、未の下刻に及んで、吉原表へ打つて出て給へば、先鋒の勢は、富士川を前に當て、段々に備へたり。大將信玄は、吹上六本松に陣し給ひ、是より蒲原の城中へ、使者を立てられ、既に、深澤・弘國寺・新庄・鷹巢・善徳寺以下、九箇所の城々、或は屠り殺し、或は戦はずして降る。當城も、急ぎ開渡すべき旨を、いひ送らる。城主北條新三郎、大剛の者なれば、此事を聞きて、某が儀は、關東に勇名を顯した

る北條長綱入道幼庵が悴にて候へば、父が勇譽を穢し、今、當城を出て、誰に面を合せ候はん。死を輕んずるは、勇士の好んずる所なり。當城、御望に候はゞ、取圍んで攻めらるべし。神命を抛つて防ぎ戦ひ、討死をして後こそ、渡し候へけれ。恐くは、我が神命の在らん限は、得こそ渡し候まじとぞ返事しける。信玄、之を聞召され、大に慥まれたる體にて、大事を前に置きながら、此程の小城一つに、人數をつひや弊さん事、宜しからず。當城は、重ねての事にすべしと、諸陣へ觸れさせられけるは、去る三増合戦に、北條家打負けて、當家を怖るゝ事、大方ならず。然れば、味方引拂ふとも、城兵、付慕ふ事はあるべからずと雖も、當城の主將新三郎は、大剛の者なれば、討つて出でん事必定なり。其餘は、大方出づまじきぞ。假令、討つて出でたりとも、味方、少しも戦ふべからず。頻に咬留めて、邪魔をなさば、控へ〜會釋ひて、必ず、したるくすべからずとぞ觸れられける。爰に、北條新三郎が家の子に、石卷彌三郎とて、名を得し忍の上手あり。何とかしたりけん。信玄の御次男、海野隆實の陣に紛れ入つて、居たりけるが、此軍法を聞かや否や、城中に馳歸り、此趣を以

て、大將新三郎に告げたりけるが、新三大に悦び、舍弟箱根の少將狩野新八郎以下、會評して、咬留むべき軍議をぞしたりける。時に、新三郎申しけるは、敵の引取る所を城中より切つて出て、先鋒と信玄が旗本の間を、取切らば、信玄大に周章て、大宮より甲州へ奔走し、先手は薩埵山の味方に攻立てられ、前後の敵に周章し、便り能くば、信玄をも討取らん事、難からじといひければ、衆議、是にぞ決しける。信玄、元より偽の陣觸なれば、敵の忍、定めて味方の方便を、城中に告げん事を察し給ひ、味方より間者を以て、聞き給へば、案の如く、味方の謀を以て、敵、實と思ひ、重疊、味方を咬留むる軍議を聞召し、仕濟したりと悦び給ひ、同じき五日の三更に及んで、打立ち給ひ、翌六日未明には、由井・倉澤迄押出せり。辰の刻に及んで、先陣小山田備中守昌辰、旗本に先立ち、油斷したる體にて、討つて通る。案の如く、城主北條新三郎、狩野新八、士卒を率ひ、城を拂つて突いて出て、小山田と旗本の間を、會釋もなく突いて入る。小山田、心得たりと取つて返し、推參なり。己等、當時、武田の鋒先に向つて、軍せん者、夏の蟲の燈を愛するに似たり。不覺して後悔すなといふ

儘に、一足も引くべからずと下知をなし、火花を散らし突合ひける。既に、戦、半ならずと思ふ頃、兼ねて相圖の事なれば、伊奈四郎勝頼、後陣より道場山へ備を廻し、自ら真先に進み、城門を志して、唯、一息に乗込まんと、甲州立の駿足に、諸鎧を合せて駆けられけり。此道場山の方を、善徳寺曲輪と號す。之を見て、新三郎、敵に方便られたるぞ。引返せと、急に引取らんずるを、小山田、扱こそ、後悔先に立たずといふ諺を知らずや。容易く引かせまじ。小山田備中守が咬留むるぞと、ひた／＼と付慕ふ。城兵、今は討たるゝ事をも顧みず、無二無三に、城中を指して逃入りけり。真田源次郎信尹は、深澤にて信玄より給りし、北條氏勝が黄八幡の大指物を、山嵐に翻させ、善徳寺曲輪の一番乗ぞと名乗りて、城中に乗込んだり。茲に、落合市之丞は、小山田備中守昌辰が手へ、御使に來りけるが、真田に續いて、乗入らんとする所を、城内より、加藤助四郎と名乗つて、落合が指物を奪取る。市之丞、是は無念と、頓て乗込んで、指物を奪返し、則ち其敵、助四郎を討取つたり。吉田左近進初鹿傳右衛門も、一同に乗込みける。落合は猶も勇み進んで、敵中に入りけるが、十

三箇所迄、疵を蒙り、左の指、五つともに切落され、朱になりて引返す。其外、我も我もと乗込んで、息をも續がせず、攻立つれば、城兵、今は防ぎ兼ねて、本丸に颯と引入れたり。駿州先方、岡部忠兵衛尉が郎等、小鹽市右衛門、本丸の一番乗どと名乗り、倫を離れて乗込めば、是に續いて、澤江左衛門、常磐萬右衛門、入江五右衛門、大石四方之介、是等は皆、岡部が家人なるが、我劣らじと乗入りたり。城兵にも、石卷彌三郎、渡邊豊前、二見右馬助、命を義の爲めに捨つると呼んで、各、同じ枕に討死す。今は城兵、残り少なくなりければ、城主北條新三郎、命は是迄なりと、舍弟箱根少將長順、狩野新八郎、清水太郎、左衛門、新田又八郎、引野大膳、同圖書助、上原甚太郎、同甚三郎、大草右京、同右近以下、究竟の者共廿八騎、前後左右に相従へ、眞一文字に切つて出て、四方に敵を引受けて、死狂にぞ働きける。各、將の命に代らんと思ふ逞兵等、少しもためらふ氣色もなく、井の字に割立て、巴の字に廻り、合ひては別れ、別れては廻り合ふ。されども城兵、次第に滅じ、僅十騎計りになりければ、早晚迄罪を作るべきと、主従十餘騎、竟に腹をぞ切りたりける。北條新三郎を始め、城兵の

首、合せて七百十一級討取り、勝鬨を執行ひ給ひけり。北條の門葉多しと雖も、此新三郎は、分けて勇武、常人に超えければ、氏康、懇志淺からず。扱こそ、此蒲原の城には置かれけれ。寔に、死を善道に守つて、勇名を永く、後代に残せりと、感ぜぬはなかりけり。されば、最後の憤念に依つてか、此山中に怨靈残り、樵夫、草刈など、折節、之を見る事ありと、里民共申傳へけり。

薩埵山軍 附 駿府・花澤等開城 並 繩無理之介が事

信玄は、蒲原の城を攻落し、由井・金澤を打過ぎて、薩埵に押出し、山上を見上げ給へば、旗少々、木蔭に翻つて味方を遮らんと、待懸けたる體なれば、馬場美濃守を召して、薩埵山に控へし敵を見積るべしと仰せければ、信房畏まつて、敵は、伊豆相模の集勢の一揆原と見えて候。然れども味方、長途を打つて、人馬疲勞仕つて候へば、若し、一揆の爲めに、一備にても切負け候はゞ、長き御弓矢の瑕にて候と、申す所に、城の入道伊庵、何程の事の候べき。いで、蹴散らし候はんと、足輕を押立

薩埵山合戦

駿府開城

て、眞幕になつて突懸れば、信房も、伊庵討たすなと下知して、山上へ攻登る。元來、一揆の事なれば、一戦に打散らされ、立足もなく敗走するを、興津河原迄、追討にして、首共を多く斬懸けられ、清見寺を過ぎ、庵原川を打渡り、江尻を越え、沓谷を馬手に見て、翌日、駿府の城に、押寄せ給ふ。此城には、岡部次郎右衛門・久野彈正・森川日向守・酒井極之介等、楯籠つて神命を惜まず戦うたり。中にも岡部次郎右衛門尉は、今川氏眞の近臣にて、大剛の者なりしが、鐵炮を餘多つるべ懸けて、玉薬を惜まず防ぎければ、さしもの武田勢、疵を蒙り死を致す者、若干に及びけり。信玄見給ひ、岡部は、聞及びし剛の者なり。一命を助けて、召使ふべしとありて、臨濟寺の和尚を以て、様々に、和議を入れられければ、岡部を始め、悉く城を開いて渡しける。則ち次郎右衛門を召出され、本知三百貫を、三千貫にし給ひ、五十騎の士卒を預けられ、侍大將にぞなされける。斯くて、信玄、宣ひけるは、花澤の城には、小原肥前守父子、籠りたりと聞く。來正月には、早々、花澤の城を攻落すべしとぞ仰せける。斯かりければ、其年、陣中に暮れて、新玉の春に立歸り、永祿十三年正月下

信玄花澤城を攻む

旬にもなりければ、駿州花澤の城に押寄せ給ふ。城將小原肥前守、弓・鐵炮を飛ばして、防ぎ戦ふ事嚴重なり。爰に、岡部次郎右衛門が弟岡部治部右衛門は、武田家に降つて、初ての軍なれば、粉骨を盡さん爲め、先手に罷在りけるが、花澤腰曲輪の近所なる、高き屋根に登り、城中を見積り居けるに、信連入道遙道軒、仰を承つて、巡見して見られけるが、岡部が登り居たる屋の上に、同じく上り、城中の體を見給ふ。其時、岡部、此處殊の外、弓・鐵炮荒く候とて、戸板を取集めて、遙道軒の前に立てける。信連入道見給ひ、運を天道に任するぞとて、悉く戸板を押倒さる。岡部兄弟、頻に諫むれども、用ひ給はず。斯くて、兩人の者共、主君の御連枝と一所にあらん事、恐ありと、屋根より飛下りけるに、腰曲輪の乾堀の中に飛込んで、治部右衛門、腰の骨を打損じけり。然る所に、伊奈四郎殿、一番乗を心懸けられ、門前に乗寄せらる。是に續いて、長坂左金吾入道釣閑・初鹿傳右衛門・諏訪越中守・繩無理之介等、馬に紅梅を嚙ませて出来る。時に、初鹿傳右衛門、先に進みし繩無理之介に、城門の上鎖子を揚げ候へといふ。繩、聞いて城中の鐵炮、雨の如くにて、揚げ難しと答ふ。初鹿

聞いて、物々しや。無理殿、無理に揚げ給へ。さなくば退き候へと、ついくぐり錠前を押し上ぐれば、諏訪越中守、己が鎗の柄を指込み、捻開け立歸り、諏訪初鹿兩人にて、無理之介が着たる繩の羽織を取り、向後、無理之介と名乗らせまじと忿りければ、勝頼、様々扱ひ給ひ、羽織を取つて、無理之介に返されけり。信玄、此體を聞き給ひ、四郎討たせては、叶ふまじと、軍勢を揚げらるべしとの軍使、再三に及びければ、此上はとて、勝頼、軍兵を引揚げらる。諏訪初鹿兩人、最前の鎌鎗を取つて殿となり、徐かに引取りけるを、譽めぬ者こそなかりけれ。爰に、三枝勘解由左衛門尉・真田喜兵衛尉・曾根田匠助三人は、日頃、斷金の交、淺からざれば、三枝、兩人に向つて、つゞ、三人馳抜けて高名せんといふに、曾根・真田、いふにや及ぶと一同して、唯三人、轡を竝べ取つて返し、既に門前に至る時、城兵、城戸を押開き突出づる。三枝勘解由左衛門時行、虎口の一番鎗ぞと名乗つて、究竟の敵二騎、突伏すれば、真田喜兵衛尉昌幸・曾根内匠助、二番鎗を突いて働きたり。中にも、曾根は、岩崎主馬右衛門といふ大力の剛の者を、突伏せ首を取る。之を見て、胴勢、咄と押付て、頓て門を打

破り、追込んで追出され、追ひつ捲くつつ、聲を揚げてぞ戦ひける。然る所に、幸澤口より、敵兵、一同に切つて出づる。寄手の手より、孕石源右衛門、一番に鎗を入る。城兵にも、井伊彌五郎・杉原戸兵衛・弓桁又左衛門・小原權右衛門以下、究竟の城兵等、物々しと鬨り、爰を先途と捫合ひたり。甲兵には、落合治部・舍弟左平次・天野一平・田宮權左衛門・白畠與七郎以下、一息に切落さんと、切立てく攻めけるに、駿州方の瀧三郎左衛門尉は、聞ゆる強弓の精兵なりければ、小高き岳へ走せ上げ、矢把を解いて押しくつろげ、差取り引詰め射たりけるが、大雁俣を以て、落合治部が唯中を射通したり。弟の左平治、兄が首を、敵に取らせじと、肩に引懸け退く所を、城兵、遁さじと追蒐くる。攻兵も亦助來つて、左平治を引包んでぞ退きける。信玄、此體を聞き給ひ、旗本より螺を音太に吹立てさせ、太鼓を打つて、總乗の色を見せ給へば、城兵、是に驚き、一同に引入りけり。城中、今は力盡きて、岡部治郎右衛門が手へ、矢文を射て降を乞ひ、開城すべき旨、申しければ、信玄、早々許諾あつて、城中の男女、悉く命を助けらる。士卒、我もくと徳川家へ立退きけり。之を聞きて、藤

田中城

枝徳の一色も、開落してぞ逃げ行きける。是は究竟の要害なりとて、馬場信房に、繩を添削せさせられ、馬出等を附けて、田中の城と號せらる。江尻の城も、信房が繩張にて、山縣を差置かる。清水にも同じく屋敷を構へらる。是は關東梶原海賊、攻來り、此所を乗取るべきか、若くは敵乗取りたる時は、味方より攻取り安きやうにとの繩張、これ山本道鬼が、馬場信房に相傳ふる城取り極意の深祕なり。扱も今度、繩無理之介が舉動、初鹿傳右衛門・諏訪越中守に劣りたりとて、如何なる者かしたりけん。一首の狂歌を連ねて、武田兵庫助信實の陣前にぞ立てたりける。

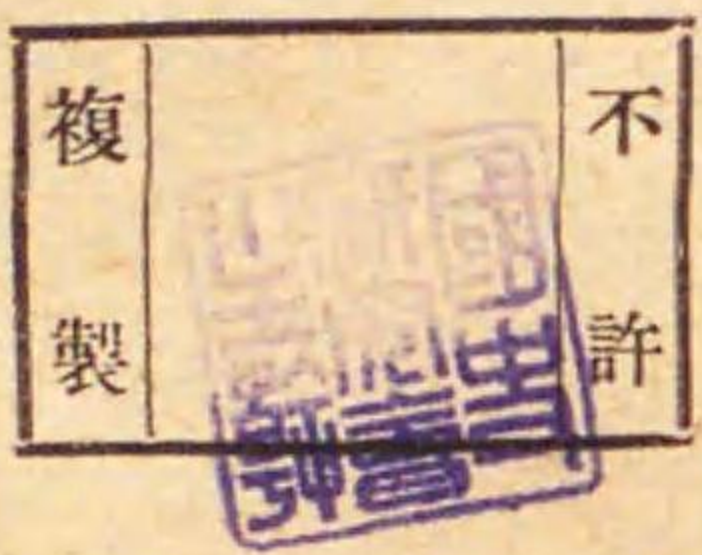
無理之介道理之介と名乗るべし無理なる事をする身でもなし

然れども、繩も大勇の者なれば、敢て小辱を恥しとせず。何ぞ我れ、大切の場に臨んで、無理なる舉動を、すまじくやとぞ粒語さける。斯くて、信玄、田中に座す所に、織田信長より、佐々權左衛門を使者にて、唐の頭二十・毛氈三百枚・猩々皮の笠を送らる。此笠は、去る永祿十年、將軍義昭卿の供奉して、上洛を遂げ、京都に置き參らせ、公方と仰ぎ奉りし時、自ら着用して候へば、吉例の笠にて候條、進上仕ると

て送られけり。信玄、此笠を土屋平八郎に給はり、信長の武威に、あやか靈體るべしとぞ仰せける。唐の頭は、近習の面々に、配分して與へられけり。かくて、江尻に至り給ひ、三月下旬迄逗留あつて、駿州一遍に治められ、其後、甲府に凱陣ましましけり。

武田三代軍記卷之第十四終

大正五年四月十二日印刷
大正五年四月十五日發行



發行所

東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番

國史研究會

編者 黑川眞道
發行者 右代表者 小瀧淳
印刷者 福山福太郎
印刷所 福山印刷製本所

東京市本郷區駒込林町二二四番地
東京市牛込區西五軒町五二番地
東京市牛込區西五軒町五二番地

國史叢書

武田三代軍記一

定價金一圓

KE 7G-84

